# かずみ・２２００年の未来へ行く

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かずみ・２２００年の未来へ行く

【Ｎコード】
Ｎ０７５７Ｚ

【作者名】
窪まり

【あらすじ】
２００年後の未来から、ある日突然、時空の裂け目から、全裸の女性がアパートの窓から入ってきた。女性にしか興味がない、２０歳の、かずみは、なぜ？突然、全裸の美少女が入って来たのか理解できなかった。　彼女の正体は、２００年後の未来から来たアンドロイドであった。５年間の女同士の同棲をしたが、突然別れることになり、２００年後の未来で彼女と再会したいために、自分の肉体を冷凍保存するために風俗嬢として働くことを決意した。だが現実は厳しい。いろんなお客を相手にしなければならない。なお、性風

俗の世界を想像で描いたものですから、リアリティは少ないかも知れません。なお百合描写がありますので苦手な方は、注意してください。

## かずみが、なぜ性風俗嬢になった理由（前書き）

ある日、突然、全裸の美少女が、主人公かずみの部屋に入ってきた。
５年間の同棲生活にピリオドを打ち、本気でアンドロイド１９９Ｊｐを愛してしまった。
２００年後の未来に行くため自分の肉体を冷凍保存しようと考え、性風俗の世界に入った。

## かずみが、なぜ性風俗嬢になった理由

かずみは、２００年後の未来から来た美少女アンドロイドと恋に陥いり、５年間も毎日のように女同士の肉体関係をもっていた。

だが、突然の別れに消沈してしまった。

美少女アンドロイド１９９Ｊｐは、謎の時空の歪みから２００年後の未来からタイムトラベルして来たのである。

２００年後の未来の科学でも不可解な現象である。そして、約５年間、かずみと１９９Ｊｐというアンドロイドは女どうしの恋愛をし同棲しまったのである。

１９９Ｊｐは、見た目は普通の少女と区別つかない。かずみのアパートに５年間居候していた。女同士で肉体関係を持ってしまったのである。

その５年間の思い出が詰まったアパートからでることになった。それは甘づっぱい思い出がみちているから、一人で、その部屋にいると、孤独感を感じる。とても切ない気持ちになるからである。

インターネットで、「自分の肉体を冷凍保存し、未来へ旅立つ」という記事を見つけ、２００年後の未来へ行くことを決心した。

だが、自分の肉体を冷凍保存するには、数千万円もかかる。どうすれば、２００年後の未来へ行けるか考えた末、最もてっとり早いのが、風俗嬢になることである。

だが、かずみは男性がとても苦手である。ましてＳＭ嬢の女王様になるしても、男性の裸を見るだけでも抵抗がある。その上、いじめられて興奮するのを見だけで吐き気をもよおす。

かずみ２５歳。２０歳のとき２００年後の未来から来た美少女アンドロイドに恋してしまい、初めは一緒にお風呂に入り、同じベットの中で一緒に寝て、それがエスカレートして、あらゆるレズ行為をする仲になった。

女性が女性を求める風俗店はないだろうか考えた。インターネットで検索したが、なかなか良い店がない。私に相応しいビアン専門のお店はないだろうか？

かずみは独り言を言った。

「やはりオンナ同士が、一番気持ち良いわ。特に若い子だと肌がツルツルして肌と肌が接触するとき気持ちいいの。どう考えてもオンナ同士でエッチなことをするのが私にとって一番相応しいわ」とつぶやいた。

かずみのビアン風俗嬢レビューとなるが・・・。

かずみは中学二年生の時、もう少しのところでレイプされそうになったため、男性を嫌悪するようになった。学校の裏で、ガラが悪そうな不良男子生徒に襲われ、悲鳴を上げた。危うくレイプされそうなところ、他の女子生徒たちが通報してくれた。そのなかで先輩の美しい女子中学生がいた。髪の毛が長く、とてもきれいだった。その美少女の先輩は、かずみに優しく声をかけた。「大丈夫？」膝や太ももにアザができ、軽い擦り傷があるので、その先輩の女子中学生は、かずみを優しく介抱してくれた。

『なんときれいな女性なんだろう』と思った。それ以来、女性に対して性的な感心をもつようになった。

それ以来、かずみにとって彼女は憧れの対象になった。それ以来、その経験によって、男性は怖くってしかたないと感じた。どんなにおとなしそうでも、やさしそうでも男は、人の目がいないところではオオカミになると思ったからである。その事件以降、かずみは異性に全然興味がなくなった。いや、男性を強く嫌悪するようになった。そして女子高に通うようになり、百合の世界に目覚めてしまった。

女子高での生活はバラ色だった。そして女子短大に入学し、いろんな女の子とつきあうようになった。オンナ同士の楽しい思い出ばかりであった。卒業後、親元を離れ、アパートを借りて生活したときに、突然の閃光、自分の部屋が歪んだように見えた時、窓から全裸

の美少女が入ってきた。

かずみは、あまりにも美しい身体を見て、それは芸術的な美しさだったので感動してしまった。

「これは夢なの？とてもリアル！」だが現実だった。

タオルを持ってきて、その全裸の美少女と話し合った。

「あなたは、どこから来たの？わたしの名前は、かずみ。あなたは？」

その全裸の美少女は、しばらく黙っていた。

『わたし夢を見ているのだわ。これは夢。こんなＳＦチックなことなどありえない。もしあったら逆に気持ち悪い・・・』と考えた。

全裸の美少女の肩にタオルを置き、話し合った。

そして食事をすすめたが、その全裸の美少女は何も食べようとしなかった。

かずみは、彼女がアンドロイドであることに気づくまで時間がかかった。

なにか着るモノをと探して、下着とパジャマを用意した。だが下着の着かたを知らないアンドロイド１９９Ｊｐは、それが何なのか理解できなかった。

かずみは、もう一度訪ねた。「あなたの名前は？どうして全裸でここに来たの？」

かずみは足の裏をみた。１９９Ｊｐという刻印があり、「かわった入れ墨ね。」その時、アンドロイド１９９Ｊｐは初めて答えた。

「それは私の製造ナンバーです。わたしの体内にあるナノチップにはもっと詳しい製造情報が入力されています」

かずみは何のことなのか理解できなかった。まだ普通の人間だと思い、まさかアンドロイドとは思わなかった。

かずみは先に夕食を食べたが、アンドロイド１９９Ｊｐは、いつまでもトイレに行かないし、差し出した飲み物や食べ物に手を出さなかった。

そしてアンドロイド１９９Ｊｐは突然、無機質な言い方で言った。

「私の残り稼働時間は、２００７５日」

かずみは「？？？」と思った。

そして、アンドロイド１９９Ｊｐにお風呂入らないかと言った。

「お風呂とは何ですか？」

「え？何なのこの質問は？」と、かずみは唖然した。

「お風呂とは、身体を洗うところなの」

「では、外部の汚れを落とす作業ですか」

「そうだけど」

「あんた。全裸で私の部屋に突然は行ってくるし、いったい何なの？」

その時、かずみは二人でお風呂に入ることを考えた。

お風呂に入ると、二人は全裸であり、そして、身体を見たら、体毛が全く無い。

「あの娘、全身、完全脱毛なんだわ。徹底しているわ」そして足の付け根、すなわち下腹部を見て驚いたのは、肛門と女性性器が無いことに気がついた。

『もしかして、彼女はアンドロイドなの？信じられない！今の科学では作れないはず』

かずみはアンドロイドだと初めて認識した。

かずみは質問した「あなたの製造年月日はいつなの？」

「わたしの製造年月日は西暦２１９７年９月３日午後７時３５分で

す」と答えた。

「え！今は西暦２００６年１２月なんだけど・・・。」

ふたりでシャワーを浴びたときアンドロイド１９９Ｊｐは言った「私を洗うとき、なぜ水温４０．５度の温水をかけるのですか？」

「それは、温かいほうが良いに決まってるからじゃない。冷たい水で洗うと風邪ひくし」

「では、この水の集まりは何ですか？」

「お風呂に決まっているじゃないの」と答え

「『おふろ』とは何ですか？」と質問した。

「お風呂とは、人間の身体を温めるためにあるもの」

「一緒に入ってみない」といって、アンドロイド１９９Ｊｐをお風呂の入り方を教えながら入れた。

二人が入ると、お風呂のお湯がたくさん出て行った。

かずみとアンドロイド１９９ＪＰは、お風呂の中で、抱き合った。

「とても気持ちいい。彼女の肌がすべすべして、弾力があって、私の身体そのものがとろけそう・・・」

「こんな気持ちいい思いをするなら今すぐ死んでもかまわない」と強く感動した。

それが、かずみとアンドロイド１９９Ｊｐとの初めての出会いだった。

だが、その５年後、時空の裂け目ができた時、２００年後の未来に戻らなければならなと思い、アンドロイド１９９Ｊｐは、かずみの元から去ってしまった。別れのときが訪れたショックが強すぎて、かずみは職場を無断で休むようになった。

そして、ネットで自分の身体を冷凍保存して未来で再生してくれる記事を読み、いちかばちかで２００年後の未来へ旅たというと本気で思った。

## 厳しい性風俗界の現実　暇で長い休日

かずみは２５歳で性風俗デビューした。年齢的には遅いデビューである。

かずみは今後の生活を考えた結果、ＯＬの仕事をしながら、風俗の仕事を隠れてすることにした。

土曜・日曜日が、かずみの風俗出勤日である。

ビアンを相手にするデリヘルであり、お客の指名があれ、お店の自動車でラブホテルまで送るのである。ボーイッシュな顔をしているので、ときどき、おとなしくかわいらしい十代後半の少年と間違えらることが良くある。もっと幼い顔だったなら、ショタ向けの外見になったかも知れない。

かずみはネットでビアン系性風俗店の募集を探し続けた。

ビアン系の性風俗店は意外と少なく、最近の性風俗店にとって大きなライバルは出会い系サイトである。

高いお金を出して性欲を発散するよりも、出会い系サイトでセックスフレンドを作るほうが手っ取り早いからである。

だから高いお金に見合ったサービスをしなければ、リピーターがつかない。指名されないから稼げないのである。いまどき正社員のＯＬでも、まだ２０代では一ヶ月で給料を使いきってしまうから、とても短期間で数千万円ものお金を貯めるなんてできるわけがない。

また、今どきＯＬ（それも正社員）という美味しい職業を辞める訳

にはいかない。
イメクラなら、残業を断れば、毎日、出勤できるが、相手は男性だから、かずみにとっては気が遠くなるような仕事である。とても男性を相手にする気にはなれない。
イメクラは、ターミナル駅がある場所ならどこにでもあるが、ビアン系風俗店はほとんどないから、えり好みできないのである。

性風俗デビュー初日の土曜日の午前１０時半にお店で待機した。
待機中は、狭いお店の中で他の風俗嬢と会話したり、テレビを観て時間をつぶす。
性風俗初日、かずみを指名するお客は誰もいなかった。

かずみは容姿がよくスタイルもいい。今日はなぜかお客さんの指命が来なかった。ギャラはもらえず、待機料だけ、ほんの数千円だけしかもらえなかった。

悔しくなって、一人でバーに行き、お酒を飲んだ時、若いお兄さんから声をかけられたので無視したが、何度も声をかけるので、ほとんどお酒を飲まず、急いで料金を出して出て行った。
若いお兄さんは、おとなしい優しそうな男性だったが、かずみは男は大嫌いであった。

途中、コンビニでお酒と、つまみを買い、テレビをつけビアン系のＤＶＤを観た。
ビアン系の女優二人がが裸でエッチなことをしている。そのＤＶＤは某大手の通販サイトから購入したモノである。

出勤初日は、ボーイッシュな、かずみとって似に合うショートパン

ツにタンクトップである。季節的には肌寒い。この服装は肌を露出し過ぎ。
男もののYシャツを着て、ビアン系ＤＶＤを観ていると性的に興奮してしまい無意識に、手がショーツの中に入り、オ〇ニーをしてしまった。アルコールが入っているから自制できない。

気がついた時には深夜2時になっており、日曜日の朝もお店に出勤しなければならないと思い、シャワーを浴び、そのまま裸でベットの中に入って寝た。

日曜日にお店に出勤した午前１０時半、今日こそは指命されたいと思った。
狭いお店で、他の風俗嬢が次から次へと指名され、外出したが、かずみはいつまでたっても、指命されず、半分苛立ちを感じた。

かずみは、つぶやいた「わたし胸が小さすぎるから指命がないのかも。胸の大きさは女の魅力だから」

夜7時、やっと、かずみに指命された。

それは既婚の４０代の女性だった。一緒にデートするだけのお客だった。

「やっと、指命されたわ。よし、頑張るぞ」と行き込んでいた。

その４０代の女性は、ふくよかでウエストが太く、そして年齢よりも老けていて、自分の母親みたいな女性だった。そのお客を観た時、かずみは性的に萎えてしまった。でも、デートだけだから、ちょっと買い物をしたり、一緒にお酒を飲むだけで十分だから、まさか肉体関係はないだろうと思った。

「このお客さん６０分だけのデートコースだから、適当に一緒にいればいいだろう」と思ったら、人気がないところで、かずみの露出した太ももを突然、揉み出した。かずみは、いかにもボーイッシュな雰囲気だからいつもショートパンツを履いている。

「いきなり、太ももを揉むなんて大胆なお客さんですね」と苦笑いしながら言うと、

「あんたを指名したのは、まるで少年みたいな顔だから。もともと私は女性に興味がないから」といって次は、強引に口づけをされた。

かずみの無い胸を見ていった「胸がほとんどないから、まるで、かわいらしい男の子みたいだから」と言われ、カチンと来た。その「男の子みたい」という言葉が気に入らなかった。

それから、かずみは髪の毛を伸ばし、できるだけフェミニンな女性になろうと決心した。

かずみはお店に帰った時、同僚の風俗嬢に今日のことを愚痴ったが、大声で笑われた。

結局、指命したお客は、４０代のふくよかな女性一人だけだった。当然、歩合制であるから、お客一人、それもホテルには行かないデートコースだから、今日の、かずみの日当も安かった。

悔しくってしかたなく、そのままバーに行き、お酒を飲み、酔いつぶれてタクシーを使って自分のアパートに帰った。

## さらに厳しい性風俗界　真性サドや性格が悪いお客さん

かずみはビアン系性風俗の仕事は快楽と実益を兼ねたモノだと思ったが現実は、そう甘くない。

かずみが土曜・日曜に勤める性風俗店では、風俗嬢の入れ替わりが早い。

なかなかお客さんからの指名が来ない、かずみはなぜ、お店の風俗嬢がすぐに辞めてしまうか、一ヶ月以内で理解できた。

ほとんどが、性格が悪いお客か、女性を虐めることに快感を感じるお客ばかりである。

不特定多数の女性とエッチなことをして、気持ちいい思いをして、短期間で数千万円も稼ぐなど、現実は甘くない。

かずみの場合は、ほとんど６０分とか１２０分のデートコースであるから、ただ一緒にいてお客さんの愚痴をうなずくだけでよかった。ほとんど女性同士の肉体関係がないから、あまり稼げないのである。

で、この業界になれ始めた時、かずみを指名するお客さんがあらわれた。

いかにも、上品なお嬢さんで、表情がやさしそうだった。言葉使いも丁寧である。

かずみは、ついに女同士でエッチなことができると喜んだ。かずみの頭の中で様々な妄想が懸け巡り、考えているうちに、ムラムラしてきてオ〇ニーをしたくなったが、楽しみは後だと自分に言い聞かせた。

お店の自動車で、あるラブホテルに送られた時、かずみはホテルに初めてのお客さんがいる部屋のドアをノックした。

だが、お店に来た時とは真逆な態度。言葉使いが悪く、かずみの無い胸を見て「少年みたい」と言った。その言葉にカチンと来て、言い返したい気持ちを我慢して、ニコニコしながら、対応した。

「お客さん。どのようなプレイがお望みですか」

「お前、まるで男みたいだな」

ボーイッシュなかずみは、その言葉をきいて、いまにも爆発しそうだった。

「おい。服を脱がせろ。この変態」

お客は、ドレッシーなワンピースであり、背中のチャックを引き下ろそうとした時、

「何やっているのだよ！このうすらバカ！お前、やる気あるのか」とキツイ口調で言った。

「わたしの服は、お前が着る安物の服ではない。丁寧にたため！」と言われた。

かずみはストレスが最高状態になり、そのお客を殴りたくなった。だが、相手はやっと自分と肉体関係を持つことができる初めてのお客だった。

そのお客は、一度限りのお客であり、この地獄のような時間を過ぎ去れば、そのお客とは永遠に会うことはない。

いかにも上品なお嬢様で、大人しそうで優しい女性は、お店に来た時とは別人のようであった。

かずみも服を脱ぐと「何なんだよ。この安物の下着。ちゃんとした女なら、人に見られても恥ずかしくない下着を着ろよ」と乱暴な言葉が返ってきた。

かずみは、もう我慢できなくなり、お店に電話しようかと迷った。あまりにも態度が横柄であるからである。

そして、かずみにショッキングなことを言った。

全裸になった二人は、かずみの顎を触り、そして乱暴な口調で言い聞かせた。

「ねえ、わたしオンナを虐めるのが好きなの。マゾ女性が快感でもだえるよりも、マゾではない女性が苦痛に満ちた表情を見るのが好きなの」

かずみは、限界に達しった「お客さん、このお店はＳＭクラブではありません！私にも人権というモノがあります。あくまでも仕事ですから」と言ったら、そのお客は逆キレしてしまった。

かずみは、これは不味いとおもって、すぐ、どけ座して謝った。とても悔しい気持ちを感じた。

「お客さん、申し訳ございません。以後、気おつけますから」

そのお客は、かずみが謝ったことによって、自分が上位にいると思い、そして持参した道具をだした。

「ねえ、これが何だか解る」

かずみの頬に、ＳＭに使う鞭で撫でた。

かずみは、丁寧に言った「お客様、それはサービス外です。申し訳ございませんが、そのようなプレイはできません」と注意した。

そのお客は言った「何言っているの！わたしに反抗する気！」

「では、シャワールームでお背中お流しいたしましょうか。」と言ってバスルームに行った。

かずみは、マゾではないから、そのお客の行為は苦痛でしかたなかった。かずみは真性レズだが、マゾではない。

バスルームに行く途中、あまりにも酷い態度のため、かずみは泣きたい気持ちを抑えながらバスルームに行った。

全裸になった二人は、シャワーを浴びた。

そして、お客さんの背中を恐れ恐れ、ボディソープを使いながら洗った。

「ねえ。やる気あるの。あんた」と言われた。

かずみは、かずみなりに一生懸命やっている。

「さぞかし性風俗嬢はお金が稼げて良い身分」だと皮肉を言われ、そして「あんた。それでも性風風俗嬢なの。こんな洗い方では身体の汚れが落ちないわよ。」そしてさらに「あんた、まともにお風呂入ってないの」とバカにした言い方をした。

そして、怒りを通り越し悲しい気持ちになり、お客さんが見えないところで涙をながした。

そして、お客さんの身体を洗い流した後、かずみも身体を洗った。
女性二人が、全裸でいて、かずみに壁に手をつくように命じた。
お客「ねえ。これから私のいうことに服従しなさい。両手を壁につけて、背中とお尻を差し出しなさい」と命じられ、いきなり強い鞭が、かずみの身体に当たった。強烈な痛みが走った。

かずみは、我慢できなくなり、そのお客に言った。
「お客さん、わたしはＳＭ嬢ではなく、ビアン相手にサービスをする性風俗嬢です。いくらなんでも、この扱いは、不正行為です！ただちにプレイを中止します」と強い口調で言った。

そして、ラブホテルの部屋にある電話機に手をかけた時、お客は、ヘラヘラした口調で言った。
「ちょっとやり過ぎただったわ。お店に電話しないでほしいけわ。今までのことは、謝るから、わたしを抱いて欲しいの」と言い始めて、かずみは電話の受話器を元の位置に戻した。

かずみは、お客さんを抱いた。全裸の女性が二人で抱き合う。
かずみは言った「ねえ。口づけしましょう」と言って、かずみとお客は口づけをした。

そして、時間までプレイが行われた。
お客の性欲が満足に達した時、そのお客は別人のような、お店に来た時のような優しい女性となった。
「今日は、とても楽しかったわ。で、名刺とか無いの？」とお客は訪ねたが、
かずみは「申し訳ございません。名刺が切れていて、今ないのです」

と嘘を言った。
本当は、今日のお客が初めてであり、名刺は有り余るほどあるが、もう二度とあのお客を相手にしたくなかった。
かずみは考えた「こんなお客ばかりだと、いくら女性との肉体関係が好きでも、嫌になるわ。だから、辞める風俗嬢の娘がいるのだわ」と思った。そして、次はお客に舐められないように、不快に感じるお客が来たら、すぐにプレイを中止しようと思った。

## 優しそうなイケメンを振ったかずみ

月曜日の朝、頭痛がした。日曜日のお客の態度が悪く、ストレスとなり、帰りには閉店までバーでお酒を飲み、酔っ払って他の知らないお客に、風俗での愚痴を言っていた。
帰り、午前2時、タクシーを呼んで、かずみが住むアパートに行った。日曜日の稼ぎは、タクシー代とバーの酒代で消えてしまった。
午前3時、ぼったり私服のままベットに横になってそのまま寝てしまった。

午前6時半、目が覚めたとき、頭が痛い。会社を休もうと思ったが、今日は月曜日。
月曜日に突然休むわけにはいかない。いや、休みにくい雰囲気である。

洋服と下着を着替え、いかにもＯＬらしい服装をした。ミニスカートに黒のストッキングを履いて、必死な思いで出社した。「今日が月曜日でなければ、休めるけど、突然、月曜やすむと上司に変な目でみられる」とつぶやいた。

頭痛がするから仕事がはかどらない。早く退社時間がくるのを待っていたが、やっと正午になり、近くのレストランに女性の同僚と一緒に食事をしに言った。ほとんどの会話は、韓流ドラマのなどの話題があるが、かずみはあまりテレビを観ていないので、内容が良くわからず、ただ、適当にうなずいていた。そもそも、かずみはテレビを観るとしたら、ビアン系のＤＶＤしか観ていないのである。または、かわいらしい１０代のマイナーなグラビアアイドルのＤＶＤ

を観て、性的に興奮するくらいだから、とてもではないが、みんなの話にあわせられない。それは、韓流ドラマを見る時間がない。ほとんどがビアン系やグラビアアイドルのＤＶＤを観て性的興奮したらオ〇ニーするからである。

そしてレストランから帰った時、優しそうなイケメンの男性からつきあって欲しいと言われた。

他の女性なら二つ返事でおつきあいするが、かずみは男が大嫌いである。先日でも、優しそうな女性だと思いい、女性同士の楽しい肉体関係を体験できると期待したが、そのお客の本心は、若い女性を虐めることに快感を感じる鬼畜な女性だったから、たぶん、この優しそうなイケメンの男性社員も、絶対に影では鬼畜であり、つきあったら何をされるかわかったものではないと思って、冷たい口調で、おつきあいを断った。

午後の休憩時間、そのことを他の同僚に話したら、「あんた１０００年に一度のチャンスを逃したじゃないの！バカじゃない」と言われたが、かずみにはかずみなりの価値観があり、みためがどんなにおとなしく優しそうでも、プライベートでは鬼畜趣味だと思い、もし、つきあったら場合によっては命の保証はないと思った。

たしかに、かずみの顔は、かわいらしい少年のような顔で、細い身体であり、スタイルも良い。だからレオタードや競泳水着が似合うのである。

かずみは思った、「あのような大人しそうで優しそうな男性ほど、実は鬼畜。真性サディストだから、つきあったらミニスカートのメイド服を着るように強要され、その恰好のまま、ひとりで満員電車

に乗るように命じられ、ご褒美と賞して、むち打ち１００回くらわられるわ」さらに「みんなが見ている前で、お漏らしを命じられるかも知れない」と勝手に過激な妄想をしていた。退社時間のとき、外は突然の雨が降って来た。

かずみが冷たい口調で振った、イケメンの男性が、話かけてきた「傘を貸しましょうか？僕はもう一つおき傘があるから」と親切心で言ったら、かずみはキツイ口調で「あんたみたいな、へなへなした男性の傘を借りるくらいなら、雨でずぶ濡れになったほうがマシだわ」と言って、雨が降る都会の中に去った。

## かずみの母親の悩み　かずみの心の傷

かずみは、もしあのイケメンの傘を借りたら、それこそ隙をつくることになる。それを切っ掛けに、しつこく交際することを求められるから、傘を借りなかった。出社して傘をささず、雨の中を歩いた。１２月の雨は寒い。

次の日、風邪を引いてしまったため会社を休んでしまった。体温が３８度ある。

日曜日にバーが閉店するまでお酒を飲みつづけ、タクシーで帰って、かずみが住むアパートについた時には深夜３時だった。寝不足と二日酔いの二重苦で出社し、夕方には雨が降ったが傘を差さずに自宅に帰った。ずぶ濡れだった。

当然、風邪を引くわけである。

かずみは母親に電話した。母親が「もうそろそろ結婚のことを考えなさい」と言ったら、かずみは絶対に結婚したくないと反論した。かずみの母親は、おかゆを作り、それを食べさせた。そして、かずみは何故、結婚したくないのか、何故、男性が嫌いなのか話した。「わたしが中学二年生のとき、不良少年から強姦未遂されたこと覚えている」と母親に話した。かずみの母親は、かずみの心の傷が癒えていないことを悟った。むしろ、それが切っ掛けで男が嫌いになり、異性に興味を失い、同性のみに興味を持ったことを知っている。

かずみの母親は「ごめんなさい。あなたの心の傷がまだ、癒されてないことを知らなかった」と言った。「あのときは、とてもつらかったのね。変なことを思い出させて、ごめんなさい」と、かずみの母親は言った。

それ以来、かずみの母親は、結婚しなさいと変なプレッシャーをかけることをしなくなった。

かずみの母親が部屋から出て行った時、美少女アイドルの写真集を眺めながら身体を休めた。

「なぜ日本では同性同士の結婚が認められないのだろうか？」と天井をみて考えた。

「でも、わたし女に生まれて良かった。高校時代も大学時代も、オンナ同士で、隠れてエッチなことをしたし、一緒にお風呂入って、同じ布団の中でお互い全裸で寝て・・・。そして・・・。」とさまざまな思い出が蘇った。決定打になったのが、５年前にアンドロイド１９９Ｊｐとの出会いであり、５年間の同棲生活だった。

学生時代では、社会人の時と比較すれば、時間があり、アンドロイド１９９Ｊｐと、さまざまなエッチな行為をしたけど、生身の女性と違って、理想的な体型、本物の若い少女みたいな肌、触った時の身体の弾力性など、もう理想以上の気持ちよさ。たぶん、未来から来た理想のダッチワイフだったのではないかと。あまりにも完璧な女性として作ったアンドロイド１９９Ｊｐは、中毒性があった。

「未来の人は良いな。あんな理想的な女性をモデルにしたアンドロイドと、好きなだけエッチなことができるから。わたしも早く２００年後の未来に生きたいわ」と独り言を言った。

で、風邪が治りかけてきた時、レ〇プシーンがあるアダルト動画サイトをみたら、はきげをもよした。

まして、女性が男性の象徴に口を入れられるシーンをみると、急いでトイレに行って、吐いた。

そして、中学二年生のときのトラウマが蘇り、男がますます嫌いになった。

レ〇プシーンがある動画をみると、自分が腹を殴られたり、頬を思い切り叩かれ、太ももに膝蹴りを受けた時、強烈な痛みで悲鳴をあげた。とても怖い体験だった。そのため体中に傷ができた。かずみは、その時、レ〇プされて殺されるのではないかと思った。そのトラウマを思い出させるのが、インターネットのアダルト動画サイトであった。

「男なんて大嫌い」かずみはつぶやいた。

## かずみの有給休暇　競泳水着で

かずみはスマートな体型をしており、競泳水着やスクール水着、そしてレオタードが似合うのである。

風邪を引いて、年休をとって3日目、風邪も治りかけた時に、自分の体型を確認した。鏡で自分の体型を見るとき、競泳水着やレオタードを着て鏡に映して、体型が崩れていないか確認する。かずみは、自分の体型を、ものすごく気にするので、あまり食事を食べない。少食である。

ただし、かずみがコンプレックスを感じるのは、顔が少年みたいであり、胸がほとんどないことである。

性風俗は第一印象が勝負だから、少しでもフェミニンな雰囲気を出したいと思うが、髪の毛を肩まで伸ばしたときの自分の写真を、スマートフォンのソフトで、みると似合わない。男装すれば、かわいらしい男の子と良く間違えられるから、なるべく女らしい服装するのである。だから、普段着はショートパンツかミニスカートしか履かない。

だが、時々、女装が上手な「男の娘」だと思われるから、秋葉原やコミケには行かない。

かずみはウエストが、かなり細い。くくびれがあるから、それをアピールすることによって、自分は女性だと言うことを印象つけるの

である。だから身体のラインが目立つ競泳水着しか着ないのである。

かずみは自分は男性脳ではないかと思うことは、若い女性の水着姿をみるとムラムラするからである。

スリムな体型だからビキニよりも、競泳水着が似合う。夏になれば必ず競泳水着を着て海で泳ぐ。かずみの友達は、例外なくビキニであるが、かずみだけは競泳水着である。

だから、かずみはビキニの水着は持っていないが競泳水着なら何着でも持っている。

競泳水着だと、身体を少し締め付けられたような感じがするので、抱かれたときを思い出すからである。ビキニの水着にない気持ちよさがあるからである。

「だって、私がパンツ（長ズボン）を履く姿を見ると、まるで男の子みたい。髪の毛を伸ばしてもロン毛の男子だと思われるし。問題は顔なんだわ」と、つぶやいた。

だから、間違えられないように、女性的な服装をする。その結果が、上はノースリーブのブラウスかタンクトップ。下半身はショートパンツやホットパンツ、そしてマイクロミニスカートになってしまう。寒いときは、タンクトップの上にジャンバーをはおり、膝まであるロングブーツを履くのである。そしてさまざまな女性らしい飾り付けをして、自分が女性だと言うことをアピールするのである。

それに脚全体を出した方が、動きやすいし脚が長くみえるからであ

る。

いかにも動きやすい恰好をするから、ボーイッシュさを強調させてしまうのである。

## 暇な待機時間　かずみ、かわいらしい女の子に

かずみの身長は１７０センチで女性では背が高い。顔は少年みたいで胸がほとんど無い。そして背が高いというコンプレックスを持っている。

「わたしって、人が思っているほど活発でもないし、むしろ内気。ただ女の子だけには積極的なだけ。キャリアウーマンでもないし、仕事もたいしてできない」と、つぶやくほど自分に自信が無い。通勤のときには女性専用電車に必ず乗るが、パンツ（長ズボン）はいて通勤をすると男性と間違えられるので、ほとんどミニスカートに黒のストッキングを履いて出勤してくる。時々、パンツを履いて通勤をすると、かわいらしい少年が間違って女性専用車両に乗ってしまったと勘違いされることもあるが、かずみにとって女性専用車両はとてもありがたい。

むしろ始発から終電まで、土日・祝日でも女性専用車両を運転して欲しいと思っている。

土曜日の朝、かずみはいつもの癖で女性専用車両に乗ったら、男性もいて驚いたが、土曜日は女性専用車両でも男性が乗ることができるのである。そのままビアン系デリヘルのお店に向かった。

朝１０時半に店長に挨拶をして、次から次へとビアン系風俗嬢が出勤してきた。

そして１１時から営業が始まり、何人かの風俗嬢がラブホテルへと行った。店長も、ビアン系風俗嬢を自動車で送り出すとき、かずみ

と内気そうな風俗嬢の二人だけになった。もう一人の風俗嬢は身長が少し低く、かわいらしい女の子であった。

かずみと同じマイクロミニスカートにタンクトップという服装をしており、かずみは、その子を見ると抱きたくなる衝動に駆られた。お店には予約のお客がしばらく来ないようなので、かずみはそのかわいらしい女の子の太ももを触った。「いやっ！」と小さな声がした。かずみは、その声がかわいらしいので、我慢できず抱きしめた。「抱き心地が良い子」と思った。そしてスカートの中に手を入れた。

そのとき店長が来て、けげんな表情をした。
店長は何も無かったように、かずみに注意をしなかった。

店長は、３０代後半から４０代くらいの眼鏡をかけた女性である。他のビアン系風俗嬢には厳しく指導することがあるが、かずみにはほとんど注意しない。かずみに対して何も期待しないのか、背が高く男っぽい顔をしているから注意しにくいのかの、どちらかである。だから、待機中は何のストレスもない。

かずみはＯＬの仕事や友達（同僚）関係では、とても消極的だが、ビアン関係ではとても積極的だった。そのアンバランスさが、かずみに強いコンプレックスを抱かせた。「何の承諾なしに、隣の風俗嬢の女の子にいきなり抱きつくなんて、わたしまるで獣みたいだわ」と、店長に叱られるよりも、気が落ち込んだ。

## ＳＭプレイが終わった後、慰めに

かずみが一人でビアン系風俗店に待機中、かずみにお客さんからの指命があった。
それは、カップルからの指名である。

かずみはきっぱり断った。

だが店長は、丁寧な言葉で言った。「かずみちゃん。もし、嫌なことがあったらいつでも、このお店に電話してちょうだい。かずみちゃんだけが指名が少なすぎるし、新たな体験だと思って、頑張って行ってらっしゃい」と優しい口調でいわれると断りにくいのである。

かずみは中学二年のときにレイプされそうになった嫌な思い出があり、それ以来、男性が大嫌いになった。まして、カップルの男性の前で、裸でレズプレイをするなんて、恥ずかしくてできない。かずみにとって、とても嫌な仕事だった。

店長と一緒に、某ラブホテルへ自動車で送ってもらい、お客さんがいる部屋まで案内された。

その時、出てきたのは、男性用競泳水着（ブーメラン・三角状）を履いた男性であった。
見てはきげをもよおした。目をそむけながら男性のお客と話した。
かずみにとって男性の裸を見ると気持ちわるくなるのである。

部屋に入ると、ボロボロになったミニスカートのメイド服を着た若い女性がいた。
痛々しいく感じた。お店に電話して、今日の指名を断ろうかと思ったが、店長は今、自動車でお店に向かっている最中。店長の携帯電話の番号が解らない。

カップルの男性は、とても紳士的で言葉使いが良く、性格が良さそうだが、かずみは、その男性に強い嫌悪感を感じた。

うすくらい部屋の中でも、鞭で打たれた傷が見えるほどであり、メイド服は背中を中心に破れていた。そしてＳＭプレイの縄が部屋の中で散らかっていた。

男性は「彼女を君の肌で慰めて欲しいだ」と言った。

で男性は、「最後の仕上げを」と言って、かずみに、その女性を羽交い締めするように指示した。
かずみは、女性を羽交い締めしたとき、男性は、その女性の腹にパンチを入れた。
「ボッスッ」という音がして、女性から「痛い！」と小さな声が聞こえ、立つ力を失い、かずみが羽交い締めした腕を振り切って自分の腹を、押さえようとしたとき「しっかり立たせろ！力一杯、その娘を羽交い締めしろ！」と、かずみに指示した。

かずみは目を思い切りつぶり、その光景を見たくなかった。
その時、レイプされかけた時のフラッシュバックが起き、かずみは急いでトイレに行き、嘔吐した。

男性は「やるすぎたかな」とつぶやき、

「では、その娘を抱いて慰めて欲しいのだ。まず初めに口づけを」と言われて、かずみは、その娘へ顔を近づけたら、いきなり、その女性からビンタを食らわされた。
かずみは本能的に「この子はレズではない。レズプレイを強要されているだけなんだ」と感じ取った。

かずみは、男性のお客に怒鳴りつけたい気持ちを抑え、丁寧な口調で言った。
「お客さん、これはやり過ぎではないですか？あの子、レズではないし、それを強要されても、私としてはあまり気持ち良いものではありませんから」と言ったら、

その男性は「この子は真性マゾなんだ。だから、いじめが酷ければ酷いほど快感に感じるのだ。ぼくが君を指名し、君はこの時間にこの子を慰めて欲しいのだよ」と丁寧に説明した。

「では、このこと一緒にお風呂に入ります」とかずみは言い、その娘のメイド服を脱衣所で脱がせ、かずみも服を脱いだ。そのマゾの娘は、恥ずかしそうな顔をした。

お風呂場では都合良くお湯が入っており、かずみは「そんなに恥ずかしがらなくても良いのだよ」と言って、そのマゾの娘は、かずみに背中とお尻を向けながらお風呂に入った。

お風呂場は照明が明るかったので、背中に鞭が打たれた跡がたくさんあり、それを見て、かずみは、その男性のお客に強い憤りを感じた。「なんて、酷い人なの」と言ったとき「なぜ、あなたがそんなことを言う資格があるのですか！私の御主人様を非難しないで！」とキツイ口調で言われた。

かずみは、こんなに酷い目にあっても、御主人様を慕うとは、ＳＭは奥が深いと感じた。

ふたりはお風呂に入り、しばらく黙っていた。かずみと、そのマゾの娘とはお互いに背中を向けたままだった。そして、長時間、お風呂に入ったままだと、のぼせてしまうから、二人はお風呂からでた。

男性のお客は、「ふたりとも全裸でこちらへ来るように」と言われ、かずみは異性視線があるので、そのマゾの娘の後ろ側にいて、自分の身体を隠した。そのマゾの娘は「そんなに恥ずかしがること無いわよ」と同じことを言われた。

かずみは、そのマゾの娘に肌がくっつきそうになると「離れて！」と言われた。

そしてベットの中で、二人とも全裸になって横になった。そのとき男性は「さっきの口づけをしてくれないか」そしてマゾの娘に言った「この子と口づけをしなかったら、もう二度とお前とはプレイしないぞ。わかったか」と厳しい口調で言った。かずみは相手が嫌々、口づけする女性では、あまり気持ち良いモノではなかった。

男性の客が言ったように、口づけをした。あまり気持ち良く感じない。むしろ罪悪感さえ感じる。
『わたしはオンナ同士の口づけは、とても楽しいし気持ち良いけど、レズではない子と口づけをしても何とも感じないわ』と思った。

そして、口づけをしたときマゾの娘は涙を流した。
それを見た、かずみは男性のお客に対して強い嫌悪感を感じ、そして感情を抑えて「相手が嫌がることを強要するのは、もうＳＭではないのですか」と言った。

その男性もドＳだが、鬼ではない。「もういい。これでやめよう。ぼくがやり過ぎたから」と、意外と素直に、かずみの言葉に従った。

性風俗の世界に身を投じる、かずみは、ますます風俗業界の厳しさを痛感した。

## もう、やめようかな？性風俗業界を

かずみは、前回のカップルのお客の件により、人間の性欲は多様であるが、ＳＭはとても苦手である。
性風俗で稼ぐのをあきらめるのは、２００年後の未来に行くことをあきらめるのと等しいのである。

まして会社に内緒でやっていることだし、それ自体が違法行為なのである。
会社の社員規定では、無断でアルバイトをしてはいけないという規定がある。
それを破ったことが知れたら、最悪の場合、解雇される。

ＯＬの仕事も、正社員だし福利厚生も充実しているし、もし今勤めている会社を辞めて、性風俗業に専念するほど度胸はない。ＡＶでビアン系の女優をする度胸もないし、もし会社にばれたら、そう考えるだけで「わたしって、弱虫」と自分を責めてしまうのである。
かずみは、まるで弱気な少年そのものだった。服装をパンツにブラウスだけにすると、まるで、かわいらしい少年みたい。鏡を見ると、自分に対する劣等感が強くなるだけである。

「唯一、救いなのはスタイルが良いだけ。顔も女ぽくないし、まるでロン毛の少年みたい。こんな私だから、お客さんからの指命がないのだわ」と気が落ち込み、次の土日は、お店を休むことにした。

ついでに金曜日も休んで、木曜日の夜は、お酒を飲んで気分転換しようと考えた。

「美味しいつまみとカクテルをいただいて、気持ち良くなったところで寝る。お昼まで寝て、そして電車で宛のない旅をして気分転換しよう」と考えた。「もし、わたしが男の子に産まれたら、合法的に女の子と恋愛して、女の子とエッチな子とし放題なんだから、男に生まれた方が良かったかも」とつぶやいた。

かずみは、とてもボーイッシュだから活発で気が強いと思われがちだが、実際は気が弱く内気である。

木曜日の夜、スナックにいきカラオケを歌って、日頃のストレスを発散し、自分が風俗業で働いていることを知らない人に話し、その業界での苦労はなしをして、普段言えないことを言って気持ちがスッキリした。そして、明日の朝は、電車に乗って遠くに行こうと思ったが、いつもの癖で、ビアン系のＤＶＤを観て、何度も長時間オ○ニーしたら、いつのまにか朝になってしまった。

少し仮眠したつもりが、夕方になってしまった。

「せっかくの平日なのに、寝て一日を無駄にしてしまった。こんな私を誰か抱いて欲しい」と思い、逆に自分がビアン系のお客になれば、勉強になると思い、今からネットで検索して、ビアン系デリヘリの予約を取りに行こうとしたが、どこも予約で一杯だった。そのとき「だれでも良いから私のことを抱きしめてくれる女の人がいないか」と思った。

結局、普段、少食のかずみは、一人で食べ放題に行き、お腹一杯食べて気持ち悪くなり、夜おそくスナックに行きお酒を飲みに行った。

愚痴を言ってもスッキリできても、自分の悩みを相談する人は誰もいないという孤独感を感じた。

ネットで、何軒かのビアン系風俗店に予約して、日曜日の夕方にやっと、予約が取れたが・・・。

## かずみ、性風俗店のお客になる

かずみは、初めて性風俗店のお客なる。ネットでは顔をぼかしているので、実際にあってみないと、本当の顔がわからないのである。

かずみは、指名したビアン系性風俗嬢と、某ラブホテルで会うと、イメージしていたよりも容姿が劣っていた。むしろ内心、自分の方が、まだ女らしくかわいいと思っていた。そのビアン系風俗嬢は、かずみと違い、ちょっとふくよかであり、お腹が二段腹であり、脚が太い。

「なぜ、あんな子が性風俗の仕事が続けられるの？」と不思議に思った。

こんな質問をすると失礼だと思うが、質問した「すいませんが、あなたは何年、この業界で仕事をしているのですか」

「約3年以上はつづいている」

「ビアン系の仕事して辛いこと、やめたくなることないのですか？」

「わたし割り切っているから、何とも思わないわ」

その性風俗嬢は、かずみのスタイルの良さに感銘して「あなたキャンギャルやレースクイーンが似合うわ。もしかしてその仕事をしているの？」

「いや私は、ただのＯＬです」

かずみは、もしかしたら相談に乗ってくれると思って、

「実は、私、会社に内緒で、ビアン系の仕事をしているの」

そしてもう一言付け加えた「わたしって、良く男の子と間違えられるの。それに胸がないし」

その性風俗嬢は「容姿が良い悪いの問題ではなく、根性があるか無いかの問題ではないの」と答えた。

「わたしも性格が悪いお客に当たることがあるが、仕事だと思って割り切るわ」

「では、何があっても驚かないの」

「もう慣れっこ。何があっても驚かなくなった。どんな仕事でも嫌なことはつきものなのよ。あんたのＯＬの仕事も嫌なことがあるでしょう」と言った。

「私って、お客さんから全然、指名されないし、もう辞めようと思うけど」

「もう少し頑張って見れば」

と励まされた。

そして、タチのかずみは、今回はネコ（受け身）になり、かずみは抱かれた。

他のビアン系のお店に行くのも勉強になるわと思った。

## ノーパンは気持ちいい

かずみの休日の服装は、ショートパンツにタンクトップの服装で一年を過ごすのである。ある意味では露出症である。

土日にビアン系性風俗店の、お店にいくときは、マイクロミニスカートかホットパンツのどちらかを穿いてくるのである。

マイクロミニスカートだと階段やエスカレーターを使うとき、後ろからパンツが見られる。男性からスカートを覗かれるのでお尻をバックなどで隠さないといけない。だから、隠す必要がないショートパンツやホットパンツのほうが気を使わないですむ。裾が細いホットパンツに限るが。ホットパンツだと、下着のパンツを穿くとなぜかわずらわしさを感じるので、ノーパンである。

「ノーパンでホットパンツを穿くと、あのゴワゴワした感触がお尻いっぱいに感じるのがいいのね」というので、次第にノーパンでホットパンツを穿く機会が増えるのである。ビアン系性風俗店の同僚は、その事を知って「かずみったら、ノーパンだとお尻がたれるし、ばい菌が入って不衛生だよ」といわれグッサと来た。

「ノーパンでホットパンツを穿くと気持ち良いのに」と、かずみはつぶやいた。

ときどきお店で待機中の、おとなしそうな女の子を見るとムラムラしてきて、突然抱きついたり、胸や太ももを触ったりする。

店長は、かずみの待機態度が悪いので自宅待機を命ずるようになった。

それが、かずみにとって心理的にグッサとくるのである。「わたしは、どうせ指名されることが少ないから、ネットで予約されたときだけお店に来るだけ」と気が落ち込んだ。

次の土日は、かずみは、ビアン系ＤＶＤを見ているとき、ホットパンツの下には何も穿かず、電動マッサージ機を使って、オ〇ニーをした。「癖になりそう。だけど女の人の肌が恋しい」とつぶやきながら、激しいオ〇ニーをしているのである。

「気持ちよすぎて気が変になりそう」と思いながら、土日はお店から連絡が来るのを待っていた。

夕方、数時間に及ぶオ〇ニーが終えると、ホットパンツは〇液で汚れた。お店から何の連絡もなかった。かずみは、これはやりすぎだと思って、パジャマに着替え、テレビ番組を見た。そのとき下着がキツすぎるから、ホットパンツを穿いたとき、違和感あると感じる。パンツは小さい方がかわいらしいと思ったが、ホットパンツを穿いたときは、少しサイズが大きい下着を履いたほうが良いかもと思った。

かずみは、自分の顔を鏡で見ると少年みたいな顔だと思った。「今日は誰からも指名がなかったわ。もっと髪の毛を伸ばしてイメチェンして女の子らしいイメージにならなければ」と思った。

## 数週間後、髪の毛が長くなって

かずみは、髪の毛を伸ばした。

会社の同僚から「何か心境の変化があったの」とか「でも、短いほうが、かずみぽい」「以前の髪型のほうが良かった」といわれたが、何が何でもイメチェンしたかった。

かずみはフェミニンな女性になりたいと思った。

だが、顔はどうしても少年のような顔なので、はじめに、眉毛を細くして、いかにも女らしい顔にしようとした。それ以来、かずみは化粧も濃くなり、旗から見れば「昔のかずみのほうが良かった」という声が多かった。

服装も普段着はマイクロミニスカートでなく、ひざまでの長さのスカートにした。

お店で写真を取り直し、それをぼかしてお店のホームページに載せた。

だが、以前よりも、指名がこなくなり、むしろ、かずみが髪の毛を伸ばしたのは、逆効果であった。

店長は「かずみちゃんは、おばさんたちからみるとかわいい少年みたいで、ボーイッシュだから見ているだけで元気になれる雰囲気があるし。だからデートコースの指名があったのね。もとのかずみちゃんになったほうが良いわ。最近は全然、指名がなくなったから」と言った。

美容院に行き、髪の毛をばっさり切って欲しいとお願いし、耳がでるほど短くなったので、しばらく男の子のような、かずみになってしまい、当然、しばらく土日にはお店に行くことはできなくなった。

通勤のとき、パンツはいて女性専用車両に乗ると、背が高く少年のような顔しているから、ほかの会社のＯＬからは、「なんなの！男の子がのっている！」と思われることがよくある。

なかなか性風俗で成功するのは、難しいと思った。

性風俗の仕事をして、以前よりも出費が増えたことに気がついた。

「これでは、自分の身体を冷凍保存させて２００年後の未来に行くことは、ますます難しくなった」と、かずみは、つぶやいた。

## 穢れすぎたオンナ　かずみ

かずみは一年、３６５日、余程体調が悪い時以外は、一日も休まずオ〇ニーをするし、それも一日に2度、３度は当たり前である。

かずみ自身は、同性愛者でありビアン系のＤＶＤを観てばかりいるから、ほとんどテレビ番組をみないから、世の中の動きが良く把握できないため、ＯＬの同僚と話しが会わないことが多い。

その上、真冬でもミニスカートで生足で外出するから、異性の視線が脚に集まることが多々ある。

ジロジロみられると恥ずかしいが、いつでもエッチなことができる体制である。

だが、外見と裏腹に、男が大嫌いであるから、電車で痴漢に遭うと怒鳴り声をあげて「やめてくださいッ！！！」と叫ぶことがある。

女性ならどこを触れても平気だが、男性が触るなら、怒鳴り声を上げるのである。

かずみも２５歳であり、次第におばさん化するのを内心おそれている。

さらに年齢が加算すると体内の代謝が悪くなり肥満になりがちになるから、必要以上に食べないのである。だから、毎日、体重計に乗って自分の体重を気にしているし、とくにウエストを測ることが多い。

せっかく風俗嬢になったのに、ほとんどが、おばさん相手で、それもデートコースで、女性との肉体関係を持つことはほとんどない。

だから、よけいにオンナの肌が恋しくなる。

だから、性風俗の仕事をしてから、以前よりも出費が増えた。
とても性風俗は儲かる仕事ではない。

パソコンでオ〇ニーのネタを探したとき、ビアン系出会い系サイトを見つけ、いつでも捨てられるＷｅｂメールを作り、ビアン系出会い系サイトに登録した。あまり期待していない。どうせ、世の中、思うどおりに行くほうが気持ち悪い。思い通りに行かないのが当たり前だと思っていた。

その時、すぐに２０代のビアンの女性からメールが来た。
「どうせサクラでしょう」と思い、自分のハンドルネームを「かずみちゃん」とした。
サクラだと、コンピューター処理なので、「かずみちゃんさん」という不自然なメールが来るが、「はじめまして。かずみちゃんへ」というメールが来たので、これは本物かと思った。

もしかしたらオンナ同士でエッチなことができると思って、それを想像しただけで、ムラムラしてきて、パンツに手を入れてオ〇ニーをした。そのとき、かずみはパンツ一枚でパソコンを使っていた。

ちょっとしたことで、頻繁にオ〇ニーをするので、とても清い女性から、ほど遠く、自分は穢れきった女性だと思った。

でも、相手の顔がわからないし、もしかして、これもサクラかも知れないと思い、返事のメールを出したら、すぐに返事が戻って来た。

相手も、今すぐにでも、オンナのカラダを求めているのがわかり、都内某所のラブホテルの入り口で待ち合わせることにした。

## 出会い系　悲劇の始まり

かずみは、黒に近い灰色のロングスカートを新着した。ウエストのところが少し重く感じた。

寒いので肌色のストッキングを履いた。黒っぽいジャンバーを着た。日頃の、かずみの服装としては、とても地味だった。寒いだけではなく、ラブホテルが乱立している場所だと変な男から声をかけられる恐れがあり、なるべく地味な恰好をした。

「喫茶店とか駅の改札口にすれば良かった」と思った。

時間どおりに、相手の女性が来た。

「ごめんね。ちょっと遅れてすみません。これからよろしくお願いします」と丁寧に挨拶した。

気になるのは大きめのバックだったが、かずみは気にしなかった。

お互いに詮索しないように気を遣った。

ラブホテルの部屋にはいるとき、どの部屋がいいのか選び、そして料金を払い鍵を借りて、部屋に入った。

だれも見る人がいないので気を使わないですむ。

だが、気になるのは大きなバック。かずみは、夜食なのか着替えの服が入っていると思った。

「はじめまして。御主人様」と言われ、かずみは驚いた。

相手の女性は、すわり土下座して「御主人様。私を存分、虐めてください」とお願いした。

かずみはＳＭが苦手である。

困惑し、何をしたらいいのかわからなくなった。

「わたし、あなたのカラダの縛り方がわからないわ。いきなりＳＭなんて・・・」

「では、この私を鞭で打ってください」

「そんなこと言われても」

その出会い系であった女性は自分で服を脱ぎ、黒いボンディージの服に着替え、壁に手をついて、かずみに背中とお尻を向けた。

「さあ、御主人様、私をぞんぶんいたぶってください」と言ったとき、かずみは「ちょっと、話し合いましょう！」と言った。

だが「話し合う前に、鞭をせめて１０回だけやってください」と言われ

かずみは、その女性のお尻を軽く鞭で打った。

「御主人様、もっと強く」

かずみは思い切り、その女性のお尻に鞭を打った。

「で、１０回くらい鞭を打ったわ。ちょっと話し合って欲しいけど」

二人はソファーに座り、相手の女性は女王様を求めているのである子とを知った。

「なんか美味しい話しだと思ったら、そんなことなんだ」と思った。

お互いに詮索しないということにしているが、なぜ相手の女性がＳＭに目覚めたのか、それを聞こうとする前に、その相手から話し出した。

「わたしは中学生の時に、学校の裏で人目がつかないところで、何人かの男性にレ〇プされたの。そのままほっと置けば、子どもも産めるけど堕ろしたの。でも、やられたときの、とても乱暴され怪我して痛かったけど、とくに初めに挿入されたとき血がでて、お腹の中がカッターでスッパと切られたような感じだった。それいらい、男の御主人様の奴隷を経験したけど、やはりオンナのことはオンナが一番知っているから、オンナからイジメらたくなったの」と話した。

「心の傷はなかったの？」

「それが、子どもを堕ろしてからも、何度もレ〇プされてつづけたの。気がついたら、もう子どもが産めないカラダになっていたけど、痛いことが快感になって」と話した。

かずみはレ〇プ未遂で、心に大きな傷をいまだに解消されていない。
だから男が嫌いである。

その一線を越えると・・。

共通しているのは、見知らぬ男性からやられると、アブノーマルな性欲になることだということ。
性犯罪に巻き込まれる女性の場合、心に大きな傷を抱き、場合により、精神的にかなり不安定になり、性的なことを強く嫌悪するか、性欲に溺れるかのどちらかである。

## 心の傷は、どうしたら癒されるの？

かずみは、出会い系で出会った女の子が、「私は子どもが産めない身体にさせられた」という言葉にショックを受けた。

かずみは、同性愛者であり、一生結婚するつもりはない。そもそも、男性と結婚して子どもを作るなんて、想像できないのである。

でも女性として、もう「子どもが産めない身体させられた」というのは「何度も中絶をさせられたから、いつのまにか子どもが産めない身体になった」ということだった。

要するに、集団で何度もレ〇プされ続けても、警察に訴えられない。訴えると仕返しが怖いから。

かずみは、その話を聞いて震えた。

もう、オンナ同士でエッチなことをする気になれず、出会い系で出会った女の子の身の上を聞くだけであった。なぜ、心の傷がないのか聞いた。

かずみは、出会い系の女の子の話を最後まで聞きつづけた。

あまりにもおぞましい話しなので、今夜は、何もエッチなこともせず。一晩泊まらず、短時間で、その女の子と別れることにした。

あまりにもショッキングな話しだったので、帰りにスナックによってお酒を飲む気にもなれず、毎晩行うオ〇ニーも、ビアン系ＤＶＤを観る気になれなかった。

世の中、あまりにも想定外なことが多い。

悪い夢だと思い、少しでも早く寝ようとして、ちょっとだけワインを飲み、そのまま寝てしまった。

本来なら、オンナ同士で一晩中、エッチなことをしようと思ったが、かずみにとて、レ〇プの末、子どもが産めなくなった身体にされた話しを聞いて、ショックだった。

## 出会い系で、　女の子みたいな『男の娘』と出会う

かずみは、マゾの女性とは二度と会うことはないと思ったが、また出会い系の掲示板に、かずみ宛のレスがあった。メールアドレスがあり、メールしたら、女の子とやりたいというから、こんどこそ、外れが無いと思った。

そして金曜日の夕方、その、かわいらしい子と会い、ラブホテルへ直行した。

出会い系の子は、身長が１６５センチで、かずみより少し背が低かった。かずみの身長は１７０センチであるから、女性としては背が高い。

むしろ、かずみの方が男性みたいに見える。今度は長ズボンに紺色のジャケットを着た。
だから、他の人たちから見ると男女のカップルのように見えるのである。

相手の子は、髪の毛が肩まで伸びており、かわいらしい女の子らしい服装をしているので、かずみは、こんどこそ、オンナ同士でエッチなことができると期待していた。

ラブホテルに入り、部屋の中に入ると、その子の声は、かずみみたいに女性としては声が低いので、そのことはあまり気にしなかった。

そして、二人は服を脱ぐと、その出会い系の子には、男の象徴あることに気がつき、かずみは、憤りを感じた。

「あんた。私を騙したわね！」

かずみは怖い顔をした。その、男の娘をにらみつけた。

その男の子は裸で、おびえながら、泣き出した。

かずみも気が弱い女の子だから、もう怒るのは、やめて、話しを聞くことにした。

そして二人とも服を着て、ソファーにすわってテーブル越しで話し合った。

「もう、泣くのを止めて。あなた男性でしょ。どうして、人を騙すことをするの？」

その時、その女の子みたいな男の娘は、強い口調で「僕の肉体は確かに男性だが、心は女なんだ」ときっぱり言った。

『たしかビアン系風俗店でも、性同一性障害者のサービスがあるわ。肉体が男性でも、心は女性の人もいるわ』と考えた。

その男性は、確かに肩幅が狭く痩せている。脚も細い。体毛も少ない。その上、全身の体毛を処理している。むしろ、かずみの方が男性的である。

男性なのにウエストにくびれがある。バストが無く、男の象徴があ

るところに以外、まるで、かわいらしい女の子みたいだった。顔もかわいい女の子みたいであり、かずみの方が少年らしい顔をしている。

「だまして、ごめんなさい」と泣くから、かずみは、なぜか、その男の娘が、とてもかわいい女の子みたいにみえるので抱いた。本物の女性よりも、かわいいからである。かずみは不思議な気持ちになった。『今、抱いているのは男性。拒絶反応はない。何故だろう？』と不思議な気持ちになった。

でも、レズプレイをする意欲はなかった。

かずみにとって、例の男性の象徴が気になってしかたなかった。

かずみは、せっかくだから、ラブホテルにあるカラオケを使って、ふたりでカラオケを歌って、盛り上がった。そして冷蔵庫にあるビールを飲み、たのしい時間を過ごした。

今回も全然エッチなことをせず、ラブホテルから出た。

「今日は、たのしい、ひとときを、ありがとうございました」と礼儀良く挨拶して、その男の娘は、かずみから去って行った。

かずみは、今回だけは、なぜか拒絶反応を出さなかった。そして帰りにスナックに寄り、お酒を飲み、タクシーで帰った。

## 2泊3日　SMの旅　その1

かずみは、ビアン系性風俗店に勤めている女王様みたいな先輩と、まだ18歳、高校卒業したての後輩との田舎への旅行に3人で出かけた。

18歳の後輩は、マゾのビアンであり、同性から性的虐待を受けると快感に感じるのである。

後部座席に、かずみと18歳の後輩が乗り、女王様みたいな先輩がクルマを運転した。

「ねえ、目的地まで休み無く自分の手でオ〇ニーしなさい」と18歳の後輩に命令した。

エンジンがかかり、ミニスカートの中に手を入れ、18歳の女の子は、休み無くオ〇ニーをつづけた。

ちょっとでも手を休めれば、先輩の女王様から強い口調で叱責をうける。

そしてわざと、人目がつくように、わざと渋滞している道路にクルマを移動させる。後部座席がまる見えなのである。

かずみも、左隣の女の子がオ〇ニーしているのを見て、性的な興奮した。

理性を失い自分もやりたくなったとき「先輩、私もしても良いですか？」と訪ねたら

「でも、いま道路が渋滞しているし、みんなの目があるから、空いてからの楽しみで良いじゃないの」と言われた。

たしかに渋滞してクルマがゆっくり移動しているから、歩道からの人目があり、かずみはオ○ニーをするのを我慢した。かずみは人にオ○ニーを見せるのは恥ずかしいモノがある。だが、１８歳の後輩の女の子は、みられると逆に興奮するタイプであるから人に見せられても平気だった。

１８歳の後輩の女の子の服装は、だんだん乱れだし、ブラが外れ、左手で自分の胸を揉みだした。白のブラウスは前にボタンがついていて、まるで女子高生が着る制服みたいだった。

女王様みたいな先輩は、後輩の女の子が、目的地の旅館に到着まで手を休めるのを許そうとはしなかった。

１８歳の女の子は「手がしびれてきました。お願いだからバ○ブで勘弁して」と言った。

かずみは「このままだと腱鞘炎（けんしょうえん）になるから、この辺で勘弁したら」と先輩に言った。

先輩「かすみちゃんがいうから、この辺で勘弁するわ。でも到着したら、その分、厳しくお仕置きするから覚悟しなさい」と言って、１８歳の女の子は、手を休めた。

その時、かずみは、１８歳の女の子の太ももをさすった。

後輩の女の子から「ああんっ・・・」と小さな声がした。

「流石、１０代の女の子の肌はすべすべしている。ふとももが柔らかい」

かずみは明るい口調で、かわいこちゃん口調で、後輩の女の子に「旅館に到着したら、私と一緒にお風呂に、は・い・り・ま・しょっ」と言った。

## 2泊3日　SMの旅　その2

かずみは、18歳の女の子の後輩を「えものちゃん」と呼び、「えものちゃん。私と一緒に口づけしましょう」と後輩の女の子と口づけをした。

かずみは、久しぶりにオンナ同士でエッチな事ができる喜びを感じた。

その時、クルマの速度は速くなり、人目がつかない山道を走った。かずみは性欲のままに、後輩の女の子に対して、さまざまなエッチなことをした。

後輩の女の子は、クルマという密室の中で、かずみの性欲の『獲物』そのものとなった。

かずみは、この時間が永遠につづくことを望んだ。

「久しぶりに、女の子とエッチなことができる。私オンナに産まれて良かった」と喜んだ。

女王様みたいな先輩は、「もう少しで目的地に到着よ」と言い、そして後部座席に座ってる二人は、服装の乱れを整えた。

クルマの中は、女性がエッチな事をしたことで、オンナ臭さがあった。

そして、目的地に到着したら、外の空気が、おいしく感じた。

「えものちゃん。これから、私たち二人でお風呂に入ろう」と、か

ずみは明るい口調で、後輩の女の子に言った。

クルマのトランクを開け、荷物を持つとき、１８歳の後輩の女の子は、かずみと女王様の先輩の荷物を持った。

かずみ「いいのよ。えものちゃん。自分の荷物は自分でもつから」

「先輩、遠慮しないで、ドシドシわたしに要件を言いつけてください。そして、わたしに日頃のストレスをぶつけてください」と丁寧にお辞儀した。女王様みたいな先輩は、この後輩にメイド服を着せれば良かったと思った。今回は女子高生みたいな服装だった。

女王様みたいな先輩は「彼女の自由にさせたら。この娘、人に奉仕するのが好きだから」

で、かずみは、後輩の女の子の境遇は聞こうとしなかった。前回、出会い系でラブホテルで出会った時、頻繁にレ〇プされたすえに子どもが産めない身体にまでさせられたという話しを聞くと、恐ろしさを思い出してしまうからである。

かずみは「えものちゃん」と名付けた女の子が、何故、ビアン系でマゾになった理由は一切きかない事にした。

身長が低い女の子が、重い荷物を持つが、ここはほとんど人目がつかない寂れた旅館だった。身長が高い女性が二人は、何も持たずに旅館に入った。

女王様の先輩は、後輩の女の子に「ねえ、私たちの荷物を丁寧に運びなさい」

「ほら、荷物が落ちそうでしょう。ちゃんと私たちのカバンを握りなさい」と口うるさく注意したが、後輩の女の子は喜んだ表情をしていた。

旅館の中は、プライバシーが保たれ、女性3人は二階の客室へ行った。

旅館の女将さんが案内した。「こちらでございます。お食事は何時頃がよろしいでしょうか？」

女王様みたいな先輩「午後7時半くらいが良いわ。その時間にお願いします」と言った。

女王様みたいな先輩はデジカメを持ってきた。ほとんどお客が来ない旅館だから隣の部屋は誰も来ない。旅館も昭和３０年代に建造された、いかにも歴史が刻まれた雰囲気があり、レトロな環境である。

女王様「ねえ。隣は誰もいないね」

かずみは、ちょっと部屋の外を出て、様子みて誰もいない雰囲気だったので「誰もいないです」と答えた。今はシーズンオフで平日。お客は私たちのみ。

女王様「では、これから、かずみちゃんが名付けた『えものちゃん』の調教を始めましょう」

かずみはＳＭは苦手である。

「先輩、私、ＳＭが苦手なんです。なるべくならソフトなＳＭで」
と、かずみはお願いした。

そして、『えものちゃん』と名付けられた後輩の女の子は、デジカメで白いパンツ一つだけの姿を十数枚もの写真を撮影した。かずみは「わたしよりも胸が大きいっ」と女子高生みたいな声で言った。

「だから胸が柔らかくて気持ち良いわけだわ」

そして、デジカメで女王様みたいな先輩は、後輩の女の子のヌード写真を何枚か撮影した画像を見せて言った。

「ねえ。これをネットでばらまかれたくなかったら、私たちの言うことに服従しなさい」と言われ

「服従します。好きなだけいたぶってください」と言った。

「今回は、かずみちゃんがいるから、ハードな責めはしない。だから鞭打ちをしない」

その『えものちゃん』と名付けられた後輩は、物足りなさそうな表情をした。

確かに、かずみは、ＳＭは苦手である。まして前回のように壮絶な体験、子供が産めなくなるまで辱められた女性が、マゾだったという話しを思い出したくないからである。

かずみは、これから服を脱ぎ、旅館の浴衣に着替えようとしたとき、後輩の女の子は、パンツ一つだけの姿で、かずみに「先輩の着替えは、私がします」と言い、かずみの服を脱がせた。

かずみの下着のブラを外したとき、かずみは、後輩の女の子に抱きついた。

「先輩、もっと、きつく抱いてください」蛍光灯に光に照らされた１０代の女の子の肌は、ピカピカに反射している。なめらかさを感じさせる肌である。きれいな肌色をしている。腰にはくびれがあり、太ももは長く細い。かずみにとって、それが性的強い刺激になり、性的に強く興奮した。

かずみ「肌がすべすべしていて気持ち良いわ。それに抱き心地も良いし」

二人の女の肌が密着した。

そしてオンナ同士でエッチな事をした。

あまり、よけいな事を聞かないために、かすみは後輩の女の子と激しい口づけをした。

その時、先輩は「この辺でやめましょう。かずみちゃん」と言われ、後輩の女の子から旅館の浴衣を着せてもらった。

そしてパンツ一つだけの後輩の女の子は、女王様みたいな先輩からきつく緊縛されたい。だが、かずみの目があるので、緊縛をするのを止めた。後輩の女の子に手錠と足かせをつけて、パンツひとつだけで、しばらく放置させた。午後４時のことである。

## 2泊3日　ＳＭの旅　その３　先輩との対話

午後４時に、かずみと女王様みたいな先輩は、旅館のお風呂場に行った。

旅館の脱衣所で浴衣を脱ぎ、そして二人は全裸になった。

かずみ「わたし、胸が全然無いの。だからオンナとして魅力がないし」

先輩「かずみちゃん。もっと自分に自信を持ったら良いよ。かずみちゃんは脚がとても長いし、スタイルも良いし、顔の表情が優しそうだから」と優しい口調で答えた。

かずみ「そうかな。でもお客が、ほとんど来ないし」

そのままお風呂に入った。広いお風呂場には、かずみと先輩の二人しかいない。

先輩「かずみちゃん。ＳＭがなぜ苦手なの」

かずみ「実は、私、中学二年の時にレ〇プされかけたことがあって、それ以来、男が怖くなり・・・。
それに、たていの男の人はＳＭが好きでしょう。サドは乱暴で、マゾは気持ち悪いし。やさしそうな顔をした男ほど、怖いものないわ」

先輩「でも、もう１０年以上前の事件だったでしょう」

かずみ「顔殴られ、脚は傷だらけになった。もう思い出したくない」

先輩「いやな事、思い出させてしまってごめんね」

かずみ「先輩、気にしないでいいですよ。そのお陰で、私オンナに生まれて良かったと思うから」

先輩「でも、この世の中には、もっと心の傷をおっている女の子がいて、自分で自分の身体をナイフで傷つける子がいるのよ」

かずみ「そんな子がいるのですか？自分で自分の身体を傷つける子が・・・」

先輩「そうよ。だから、あの、えものちゃんなんか、まだ良い方だわ。で、これから、今の仕事を続けるのでしょう」と優しい口調で訪ねた。

さらに「でも、かずみちゃんは、まだ、努力が足りないわ。ネットでもっと自分をアピールしなければ。ブログをお店のホームページにリンクするとか、それに、かずみちゃんの顔は、やさしそうだから、顔をハッキリだすのもありだし」

かずみ「顔はハッキリだすのは、今できない。私、ＯＬの仕事しているし、それも正社員だし」

先輩「でも、かずみちゃんだけ、土日、のみ出勤で、平日は完全オフなんだけど、それだとあまりお客がつかないし」

そう厳しいことを言われて、かずみは考え込んだ。

そして、お風呂からでて身体を洗い、またお風呂に入った。

先輩「かずみちゃんは、なぜ、この仕事を選んだの？それも会社に内緒で」

その質問をされて、一瞬、考えた。正直な事は言えば笑われる。

かずみ「実は、わたしって、オンナに対して、とても淫乱なの？毎晩のようにビアン系のＤＶＤを観てオ〇ニーしないと生きていけない。同性愛が禁じられたら死んだ方がまだマシ！どんなに美味しい食事よりもオンナが好きなの。だから私は、この仕事を選んだの」

先輩「それだけ好きなら、ＯＬやめて、この仕事に没頭してもいいじゃないの」と、また厳しい一言がきた。

かずみは、それを言われて、自分の考えが甘いと思ったのは、５年間、一緒に暮らしたアンドロイド１９９Ｊｐと再び合うために、２００年後の世界に行くためお金を貯めることなんだと考えた。はじめは風俗の仕事は、儲かると思ったが、実際は、以前よりも出費が増えた。貯金も徐々に減ってきた。むしろお金ためるどころではない。

風俗の世界で儲けるには男性を相手にした仕事をするしかない。それもキャバ嬢とかＳＭの女王とか。

で、逆に先輩に質問した。

「先輩は、なぜ、このビアン系の仕事をするようになったのですか

？」

「それは、かずみちゃんと同じ、オンナが大好きだから。ただそれだけ。ビアン系の仕事はたいして儲からないし。儲けるには努力するしかない」と答えた。

二人はお風呂から出て、旅館の浴衣に着て、冷たいものを飲んで、ソファーで二人はゆっくり話し合った。

で、後輩の、えものちゃんは、二時間ほど手と足に手錠されたまま放置プレイされた。

## 2泊3日　SMの旅　その4　お漏らしするかも

かずみと先輩がお風呂から出て、後輩の女の子の、えものちゃんが2時間も放置されたままであった。

えもの「おねがい。手錠をほどいて。このままだと漏らしてしまいそう」

かずみは「先輩、えものちゃんの手錠をほどいたら。トイレいきたいみたいだから」

先輩は、かずみの言葉を聞かないふりして、持ってきた雑誌を読んだ。

えもの「かずみ先輩、私を抱いてください」

先輩は、かずみが抱こうとしたら、かずみに話しかけた。

そして、そとの廊下で、かずみに注意した。「ねえ、えものちゃんは今、放置プレイの最中なの。あと1時間ほど放置させてから、トイレにいかせるわ」

「でも、もし本当にお漏らししたら旅館の女将さんから何と説明したらいいの？」

先輩は考えた。

「ちょっと話し合いましょ」と言って、元のソファーがある場所に行き、30分だけ話し合った。

時計が午後６時半を示したとき、もとの部屋に戻った。

えものちゃんと呼ばれる後輩の女の子は、ほんとうに我慢した。

えものちゃんの腕は後ろ手にある手錠と足かせをほどいた。

手錠と言っても布製のものであり、ベルトと同じ構造をしている。

で、先輩のサディストさがでてきた。浴衣を着たいなら、先にパンツ一つのかっこうのままトイレに行きなさいと命令した。若い女性がパンツ一つで廊下をでて、トイレまで行く。

小さな旅館なので、トイレは廊下の突き当たりにある。

他にお客さんはいないが、女将さんや旅館の社員と会うかもしれない。

でも、先輩の命令は絶対服従である。トップレスの状態で廊下をおそるおそる歩きならがトイレに行った。

えものちゃんと名付けられた後輩の女の子は、両腕で胸を隠すような恰好で、元の部屋に戻った。

もし旅館の職員から、自分がパンツ一つだけで廊下を歩いたのを見られたらどうしようかと考えながら、廊下を歩くと、強い緊張感があり、それだけで興奮してしまった。

## 2泊3日　SMの旅　その5　女、二人がお風呂に入ると（前書き）

エロい描写が、ちょっとあるので、未成年者は読まないようにお願いします。

なお、極力、エロを抜いた表現にします。

## 2泊3日　SMの旅　その5　女、二人がお風呂に入ると

旅館で夕食をたべたあと、えものちゃんを中心とした3人の女性によるレズプレイが始まった。

えものちゃんは、ふたりの身長が高い女性から徹底的に責められるのである。

えものちゃんはローライズの赤いショーツに履き替え、それは二人のレズ女性として、とても刺激的である。

女王様みたいな先輩は、えものちゃん赤茶色のセミロングの髪の毛に白い百合の花をさした。

白い百合の花が、とてもきれいだった。

先輩「えものちゃん。かわいい。これから、えものちゃんのレズプレイを始めます」

かずみは、「えものちゃん。かわいいッ」と軽い口調で叫んだ。

えものちゃんは、赤いローライズのショーツひとつで上半身裸であるから、完全に胸が丸見えである。

恥ずかしそうに、えものちゃんは、左腕で胸を隠した。隠すとよけいに、色っぽく感じる。

女王様みたいな先輩は、えものちゃんの腕を再び、布製の手かせで、後ろ手にした状態で女の子にしかできない状態で座らされた。そのとき、胸が丸見えであり、えものちゃんは、顔を赤くそめた。

二人の女性は、性欲が高まり浴衣を脱いだ。パンツ一つだけである。

えものちゃんは、二人の女性から徹底的に愛撫された続けた。口づけしたり、胸を揉んだりした。

えものちゃんは完全にネコ（受け）になり、責められるままになった。そして、何度もいっき、赤いローライズのショーツはびしょびしょに濡れた。

かずみは至福な一時を過ごした。

「えものちゃんっの身体は、抱き心地良いし、身体が柔らかくて気持ち良い。肌がすべすべしている。私よりも、多くのお客がつくのは当然だわ」

そして約束どおりに、かずみと、えものちゃんは旅館のお風呂に入りに行った。

そして、えものちゃんは下着着なしで、浴衣を着た。

かずみは、えものちゃんと比較すると、全然、胸が小さい。

「私、ブラのAカップでもぶかぶかなんだ。ほんの気持ちだけ膨らみがある。えものちゃんは、大きすぎないし、小さすぎない、丁度よい大きさ。美乳だね」と、かずみは、えものちゃんに話しかけた。

えものちゃんは「かずみ先輩、その話、恥ずかしいですから」と、かわいらしい声で答え、我慢できず、脱衣所に行く前で抱きついた。

「かずみ先輩。誰かに見られたら恥ずかしいですよぉ」

それを、言われた、かずみは、我に返って、脱衣所へ急いだ。
脱衣所についたとき、かずみの浴衣とパンツを、えものちゃんが脱がせた。
かずみは全裸になり、浴衣すがたの、えものちゃんを抱いた。
「かずみ先輩、私も浴衣脱ぎますから、もう少し待ってください」と言って、浴衣を脱いだとき、蛍光灯に照らされた、なめらかな肌の背中がきれいにみえた。
かずみの性的に激しく興奮し心臓がドキドキして、今度は後ろから抱きついた。
「いやッ」という小さな声で、えものちゃんは、ささやいだ。
かずみの、とても小さな胸には、あまり弾力がなかった。まるで男の人に後ろから抱かれたような感じだった。かずみの肋骨がダイレクトに背中に感じる。
えものちゃんは「かずみ先輩、もっと乱暴に、もっと強く抱きしめてください」と言った。
かずみは「そのまま、湯船に行きましょうか」と言ったら、
えものちゃんは「そのままだと、足を滑らせますよ」
で、かずみとえものちゃんは、恋人のように二人で手を握って、タオルをもちながら、湯船に入った。

かずみは「えものちゃん。私のところにきなさい」と言われ、そして、かずみに後ろから抱かれた状態で、お風呂に入った。

えものちゃん「かずみ先輩、あの先輩と一緒に入ったときは、オンナ同士で何かしませんでしたか？」

かずみ「いや、普通に会話しただけで何もしなかった」

かずみは、何故、マゾ・ネコになったのか、理由を聞きたくないので先に、かずみは自分の境遇を語った。

「私はねぇ。中学二年の時に、ある不良少年から乱暴されたの。腹や顔を何発も本気で殴るし、倒れたときも、乱暴され、太ももに膝蹴りを受けたとき、強烈な痛みを感じて、助けを呼ぶというよりも、あまりの痛さで、大声で叫んでしまったの。そうしたら、何人かの先輩たちが助けに来てくれて、その時、あの不良少年が逃げたの。私を優しく介抱した先輩が、とてもきれいな女性で、それで同性にしか興味なくなったの。だから乱暴なのは嫌なの」と話した。

えものちゃんは、後ろから抱きつかれた状態で湯船に入っている。かずみは、えものちゃんが何故、マゾ・ネコになったのか理由は聞きたくなかったが、えものちゃんも、なぜビアンになったのか理由を言った。

「私の場合・・・」と言ったとたんに、強い口調で、かずみは「理由を言わないで！」

さらに「もしかしたら、私よりも壮絶な体験をしたから？」と、か

ずみは、大きな声で言った。

かずみは、男性から乱暴されたという話しを聞くと、ネットで『レ○プ場面』の動画のことを思い出し、それを考えたら吐きげをもよおすからである。

えものちゃんは、自分が何故、ビアンになったのか理由が言いにくい状態になり、自分の境遇を語らなかった。ただ「私は、オンナの人から厭らしいことされるのが三度の飯よりも好きなの。ただそれだけなの」と答えたのである。

かずみは、耳が少し出ている黒い短い髪、ほんとうにボーイッシュな雰囲気がある。それに比較して、えものちゃんはいかにも、セミロングの赤茶色の髪の毛で、フェミニンな雰囲気が漂う。二人はお似合いのレズ・カップルに見える。

かずみは、えものちゃんが壮絶な体験を語らないことに、一瞬、安堵感を感じた。

## 2泊3日　SMの旅　その6　ボンテージは気持ち良い

かずみと、えものちゃんは旅館のお風呂に、二人だけで入っていた。かずみたち3人しか、お客はいない。平日でオフシーズンである。

お風呂からでた二人は、身体を洗う場所にいき、かずみはボディソープをつけた。かずみは、えものちゃんの背中を、かずみの胸で洗った。「私が、えものちゃんを洗うわ」と、ボディソープは、まるで性風俗に使うオイルのような感じだった。えものちゃんは、背中に、かずみの胸、あばら骨を感じて「ああんッ」とうなずいてしまった。

「かずみ先輩、もっと強く私を抱いてください」かずみと、えものちゃんは立ち上がり、今度は、女の胸が密着した状態で抱き合った。かずみは、えものちゃんの胸の感触が気持ち良かった。

えものちゃんは「先輩、もっと厭らしいことをして、私を穢してください」と言った。

広い浴室の中に、かずみと、えものちゃんの二人だけしかいなかった。二人の身体は泡だらけになった。

そして、お湯で泡を流して、浴室の中で二人の女性は抱き合った。

さまざまなエッチな事をしてから、二人は浴室からでて、浴衣を着て、客室にもどるとき、二人の女性は、手を恋人のように握った。二人は腕を組み身体を密着させながら、客室に戻った。

客室には、布団が敷いてあり、女王様みたいな先輩が雑誌を読んでいた。

「二人とも楽しかった？」と先輩が訪ねたら、かずみは「最高！」と答えた。

女王様みたいな先輩は「でも、今夜はこれから」と言って、ボンテージ・ドレスの衣装、それも思い切り肌を露出し背中丸見えのボンテージ・ドレスを着た。

かずみは「先輩、えものちゃんへのＳＭはしない約束でしょう」と、少し不満げな表情で言った。

女王様みたいな先輩は、かずみに優しい口調で「かずみちゃんも、この世界（ビアン系性風俗）で、仕事するなら、レズＳＭに慣れる必要があるわ。今夜は、そんなに激しいプレイをしないから」と言った。

だが、えものちゃんの表情は、期待に満ちていた。

「先輩、痛いことするのですか」と尋ねた。

女王様みたいな先輩は「この時間から、かずみちゃんのソフトな責めから、わたしのハードな責めに切り替わります。それが終わったら三人で一緒に寝ましょう」と優しい口調で言った。

かずみは、不満があったが、これから性風俗の仕事で、オンナ同士のＳＭプレイもあるかも知れないと思って我慢した。

「わたし、あまりハードなプレイだと思ったら目をつぶるから」

「かずみちゃん。そんなにハードなプレイではないから。ちょっと、えものちゃんを縛るだけだから。縛り方だけ覚えたほうが良いわよ」と女王様みたいな先輩が言った。

えものちゃんに、半袖の白いブラウスと、パンツが見えるくらいの短いチェック柄模様の紺色のミニスカートを穿かせた。そして女子高生が穿く白のパンツも穿かせ、先輩は、えものちゃんの華奢な身体に縄をかけた。

えものちゃんは「先輩、私を思い切り縛ってください。痛くなるくらいが丁度良いですわ」と言って、女王様みたいな先輩は、えものちゃんの身体を縄で強く縛った。

縛ったとき「痛い」と、ささやいた。

女王様みたいな先輩は、ボンデージ姿になり、かずみに縄の縛り方を教えた。

「かずみちゃんは、タチ専門でしょう。だから、マゾ・ネコのお客から、縛って欲しい時、縛り方くらい知らないと」と言われたとき、かずみは内心「そんなお客さんがいるの？」と半心疑った。

えものちゃんの両腕に赤いＳＭ用の縄がきつくかけられている。その縄が、両腕に食い込んでいる。

えものちゃんは「痛い。キツイ」と小さな声で言った。

えもちゃんの華奢な身体、細いカラダに縄が巻き付いた。胸を強調させるように、二本の縄が巻き付いた。よくあるＳＭに使う縛り方である。えものちゃんの胸の上下に、縄がかけられている。

かずみにも、これからオンナ同士のＳＭプレイをするから、かずみにも黒くピカピカに反射するボンテージのホットパンツとトップをつけさせた。

かずみは、ラテックス製のボンテージの感触が良いので新しい発見をしたと思った。「先輩、ボンテージもいいですねッ！ラテックスの感触がお尻にダイレクトに伝わって」と、女子高生口調で言った。ノーパンでジーンズ地のホットパンツを穿いている時とは違った感触があったからである。

そして、女王さまみたいな先輩は、えものちゃんの首に、銀色の鎖がついた首輪をかけた。

「これで完成だわ」と女王様みたいな先輩は言った。

そしてデジカメで、緊縛された、えものちゃんの写真を何十枚も撮影した。脚が開き、ミニスカから白いパンツが見えた。それも撮影した。

女王様みたいな先輩は、えものちゃんの首輪を外し、「首輪がないほうが自然かも」と、さらに何枚かデジカメで撮影した。

そして、えものちゃんに言った「ねえ、私たちの言うことを、きかないと、今、撮影した写真を全部ばらまくわよ。絶対服従しなさい」と命令し、えものちゃんは「先輩たちの言うことには絶対服従します」と言った。

そして、女王様みたいな先輩は、えものちゃんの髪に花の飾りをつけた。

かずみ「かわいいッ」と叫んだ。

女王様みたいな先輩は、デジカメでそれを撮影し、いろんな花飾りをつけた。

えものちゃんの身体がそると、腰だけではなく、お腹、おへそまで見える短いブラウスを着ていた。

先輩は、かずみに、えものちゃんが倒れないように指示した。

「今日は、かずみちゃんの目があるから痛いプレイをしないわ。その代わり、私たち二人にだけなったら、思い存分、鞭打ちをするからね！」と厳しい口調で言った。

えものちゃんは、正座した状態なることを命じされた。足が痛くなり、かずみに、えものちゃんを立たせるように指示した。えものちゃんが緊縛した状態で立たせると、かずみは、えものちゃんの背中に抱きつくようなかっこうした。

「かずみ先輩、くすぐったいです。変なとこ触って・・・。でも気持ち良い。もっとやって」といかにも気持ち良さそうな表情をした。

女王様みたいな先輩は「かずみちゃん。そう。そう。そうゆう風に

責めるのがＳＭの基本なの」と褒めながら指導し、かずみは、『これなら私でもＳＭができそう』とうなずいた。

そして、かずみは、縄で縛られた、えものちゃんに口づけをした。

口づけし終わると、かずみは女王さまみたいな先輩に、「今、えものちゃんにエッチなことをしたところ撮影していない？」と訪ね、先輩は「かずみちゃんの写真は、一枚も撮っていないわ」と、デジカメの後ろにある液晶画面を見せた。今まで撮影した画像に、かずみの顔写真はなかった。

女王様みたいな先輩は「かずみちゃん。今着ているボンテージのトップとホットパンツ、あげるから」と言われた。かずみは、それ聞いてうれしくなった。

そのあと、かずみは性欲の虜になり、えものちゃんが、かずみの性欲の『獲物』へと変わっていった。

えものちゃんは「かずみ先輩、わたしに痛いことしてもいいですよ」と言われ、細い華奢なカラダを思い切り抱きしめた。えものちゃんは「痛い。息ができない。でも気持ち良い」と小さな声で言い、かずみは、もっと強く抱きしめた。

女王様みたいな先輩は、かずみを褒めた「かずみちゃんの責めとても良かったわ。ＳＭが苦手だというけど、あとは慣れるだけ。かずみちゃんはタチ専門でしょ？」

「希にマゾ・ネコのお客いれば、この調子で責めるものありだわ」

と静に語り、「あまり長時間、緊縛すると血行が悪く身体に良くないから、このへんで緊縛をやめましょう」と言い、女王様みたいな先輩は、えものちゃんの縄をほどいた。

女子高生の服装をした、えものちゃんは、まるで本物の女子高生みたいだった。「えものちゃんなら、女子高生の制服を着ても、誰もが本当の女子高生みたいに見えるわ」と、かずみはいった。

「脚が長いし、太ももは細いし、ももの皮膚がきれい」とかずみは、えものちゃんの太ももを触った。

「かずみ先輩、くすぐったいです」

女王様みたいな先輩は「では、これから寝ましょう」と言い、三人とも、服を脱ぎ全裸になり、ひとつの布団に、三人で寝た。えものちゃんを真ん中にして。

かずみは「女子高生の時や、短大生のとき、わたしレズっけがある女の子と、二人きりで温泉旅行に行ったとき、大浴槽も良いけど、ホテル部屋の小さなお風呂で二人だけで入り、全裸で抱き合って、そのまま寝たわ。あの頃は楽しかったわ」と言った。えものちゃんは「わたし、かずみ先輩が満足したことが、とても良かった。でも、遠慮しないで、もっと痛いことしてもいいですよ。ＳＭは、お互いに気を配れば、そんなに悪いモノではないから」と言った。

えものちゃんは、蛍光灯のスイッチを引いて、部屋を暗くして、３人とも同じ布団で寝た。

## 2泊3日　SMの旅　その7

同じ布団に3人で寝て、朝起きた。

かずみは着替えの下着を履いた。いかにもボーイッシュな女の子が穿くような下着だった。ローライズのボーイレッグ（男性のボクサーパンツみたいな下着）の紺色のパンツに、スポーツブラである。

3人とも浴衣を着て、浴室に行き、お風呂に入った。

そして、3人で大浴場のお風呂に入り、ふざけ合った。彼女ら3人しかお客がいないから、遠慮しないですむのである。この光景は、普通の女性客のように見える。

歯を磨き、化粧をしてた。

そして旅館で朝食を食べ、そして、チェックアウトするまえに、3人とも着替えた。

えものちゃんは、昨日の夜、緊縛された女子高生が着る白の半袖ブラウスにパンツが見えそうなくらい短いミニスカートを履た。紺色の長いソックスを履いている。

かずみは、少し長めの紺色のミニスカートを履き、空色の長袖のブラウスを着た。その上に、半袖の紺色のジャケットを着た。短い白のソックスを穿いている。

かずみと、えものちゃんは、スニーカーを履いている。二人もと生足である。

そして、女王様みたいな先輩は、大人っぽいベージュ色のブラウスに黒い上着を羽織った。パンツ姿である。先輩はヒールが高い茶色い靴を履いている。そして黒っぽいストキングを履いている。

女王様みたいな先輩は、かずみと同じ２５歳であるが、同じ歳には見えず、かずみのほうが若く見える。

そして３人は、クルマに乗り、行きとは違うところに座った。かずみが前部の座席に座り、えものちゃんは、後部座席に座った。

かずみは「今回の旅行は楽しかったね」と無邪気に言うと、女王様みたいな先輩は「そ、そうね」と少し、どもって返事した。「先輩、どうしたのですか？」

「いやなんでもない」と答えた。

えものちゃんは、後部座席ですやすや眠っている。

かずみと先輩は、普通の女性たちと同じような話しから、また、ビアン系性風俗の話題をしたり、かずみの相談も受け付けた。

かずみは、学力があり、偏差値が高い女子高出身であり、そのため、短大も良い成績だった。

そのため大企業のＯＬになり、それなりに待遇が良い。

だからＯＬで正社員、それに仕事も、そんなにきつくないし、人間関係も悪くない。

だけどビアン系の性風俗を専属でやっていく度胸もない。それに３

０歳すぎれば、ビアン系の仕事で稼げない。すなわち２００年後の世界に行くことを諦めることになる。いや、ビアン系の性風俗の仕事で稼ぐのは、かなり努力が必要である。

たかが5年、１０年勤続のＯＬの退職金は、たかが知れている。というか、ビアン系性風俗店の仕事しても、ほとんど稼げない。むしろ貯金も減っている。

洋服代やバーやスナックのお金に消えてしまうのである。

お酒を飲むのをやめて節約しても、たいしてことはなく、むしろ、お酒を飲むのをやめたら、ストレスがたまるばかりである。さすがに「自分の身体を冷凍保存して、２００年後の未来に行くなんていう話しをしたら笑われる」と思い、それ以外の相談をした。

『でも、あのアンドロイド１９９Ｊｐと過ごした日々は人生最高の時だった。あのアンドロイドは中毒性がある。できれば、どんな方法でも良いから２００年後の未来に行きたい』と心の中で願った。

かずみはしばらく黙り考え、先輩に相談した。

「先輩、もし現実的ではない空想にとりつかれたらどうします。そも短期間でお金を稼がないと行けない場合は？」

先輩「え？もう一度ゆっくり言って」と聞き返した。

かずみは、初めの「現実的ではない空想、望みにとりつかれたら」と質問した。

先輩「私はリアリストだから、そんなことを考えた事はないけど、もし、かずみちゃんが、それについて悩んでいるなら、わたしも真

摯な気持ちで、相談にのるわ。で、どんなこと？」

かずみ「実は・・・。実は２００年後の未来に行きたいけという願望があるの」

先輩「大胆な願望ですね。どうして、そんなことを考えるようになったの？」

かずみ「２００年後の未来は、たぶんバラ色の社会になっていて、何も悩み事もないと思うの」

先輩は、真摯な気持ちで真面目に、かずみの現実離れした話しをきいた。

そしてしばらく考えてから言った「なんの根拠があって２００年後の未来は、バラ色と思うの？」

それを言われたとき、かずみは、２００年後の未来から来たアンドロイド１９９Ｊｐと５年間、同棲したことを言うか言わない方がよいか迷った。

その時、先輩は「今、すぐには答えが出せないわ。二人でゆっくり考えましょ」と優しい口調で答えた。

３人を乗せたクルマが、某近郊部の駅前に到着した。かずみは、中距離・普通電車が止まる駅に降りる事になった。

クルマから降りたとき、えものちゃんがトランクから、かずみの荷物を取り出した。

「かずみ先輩、今回の旅行は、とても楽しかった。近いうちに、また一緒に旅行しましょう」と言って、かずみに握手した。

そして、先輩にも「旅行は楽しかった。どうもありがとうございました。また、機会があったら、一緒に旅行しましょう」と言って握手した。

先輩「かずみちゃん。なんか困ったことがあったら、いつでも私に相談してね。さっきの話しよく考えるから。では、気おつけてね」と言って、二人を乗せたクルマが去って行った。

かずみは某路線の中距離電車に乗り、自分が住んでいるアパートに向かった。

「今回の旅行は楽しかった。明日からＯＬと風俗の仕事がんばるぞ」と小さな声で言った。

だが、女王様みたいな先輩は、クルマの中で「ごめんね。かずみちゃん。もう一晩、お泊まりがあるの」

えものちゃんと呼ばれている１８歳の女の子は、「かずみ先輩は優しくて言い先輩でしたね」と言うと、

先輩は「かずみちゃんは、良い子だったわ。でも、ＳＭが苦手だし、

あまり有給休暇も使わせる訳にはいかないからね。これから、私たちだけで、ラブホテルでＳＭプレイをしましょう」と言って、えものちゃんは「先輩、存分に私をいたぶってください」と鞭打ちされるのを期待した。

先輩は「かずみちゃんには、絶対内緒だから」と優しい口調で注意した。

## 穢れたオンナの欲望と性犯罪の狭間

かずみは、やや露出症であるから、真夏だとタンクトップとホットパンツの服装をする。
時々、男性からの視線を感じるが、かずみはスタイルには自信があり、露出した太ももや胸をみられても平気である。
変な男の人から話しかけられたり、（スカウト行為）されないために、異常に人混みが多い駅前で買い物をするか、逆に閑散とした街を歩き回ることが多い。
かずみは、ちょっと肌を露出し過ぎだと思う。
ある日、警視庁が主催する「性犯罪防止キャンペン」に出席した。
かずみは、いつものようにパンツが見えるマクロミニスカートに、ひもがないタンクトップの服装で出席した。
その講演会のとき、ある講師から服装を注意された。
「そこの君。前にでなさい」と、かずみが注目された。
「なんで君は、こんなに破廉恥なかっこうをして、性犯罪防止キャンペンにでるのかね」
かずみは「普段着で来てくださいというから・・・」
「で、こんな服装すれば、男性は変な妄想を起こすし、場合によっては性犯罪の被害者になるのではないか」と言われた。

かずみ「でも、服装は自由だし」

「この女性のように、淫らな服装をすれば、変な男性に狙われ、性犯罪の被害者になります」と言われたとき、かずみは何て古い考えの人だと思った。

性犯罪の恐ろしさは、レイプされかかけた女性が最もよく知っているので、かずみは深呼吸して、気を落ち着かせてから、自分の体験談を語った。

やや狭めの部屋で、出席者は十数人の女性しかいないので、少し大きめの声で言った。

「わたしは中学二年の時に、もう少しでレイプ被害に遭うところでした。服装は今ふうのミニスカ制服ではなく、膝までのスカートでした。おとなしそうで、いまの私と違って身長は低いので、レイプするには、最も狙われるタイプだったと思います。そして、ある不良少年に呼び出され、学校の裏に追い詰められ、そこでレイプされかけました」と自分の体験談を言ったのは、自分の服装を注意したやや年齢が言っている保守的な婦警に反論するためである。

かずみは真剣な表情で、自分の嫌な体験を言った。

「レイプ犯罪は、とても怖いものです。ＡＶとは違って、本気で女の顔を数発殴るし、お腹も本気で殴られ、とても痛い思いをしました。そして、私が抵抗すればするほど、その不良少年は、本気で攻撃する。そして私が倒れたとき、私の太ももに膝蹴りされて、あまりの痛さで悲鳴をあげました。痛さで涙を流したときに、何人かの上級生が来たら、その不良少年は逃げ出しました」と自分の壮絶な体験談をしたとき、かずみの話を真剣に聴く女性たちがいる。

それでやや年配の婦警さんは「それでは、なぜ、あなたはそんなに露出した服装で、『性犯罪防止キャンペン』に来たのですか？」と訪ねて来たので、

かずみは「性犯罪被害には服装は関係ないことを主張したかったからです！」と強い口調で答えた。

「わたし２５歳ですけど、社会人になって5年間、このような服装で、変な男性から声かけられる事はなかったし、深夜の帰宅のときは必ずタクシーを使って、自分のアパートの部屋まで送ってもらいますから」と自分の性犯罪防止方法を延々と述べた。むしろ、婦警よりも、かずみの話しの方が、説得力があった。

## かずみの女子中学生編　レイプされかけた時（前書き）

しばらく、連載がとぎれました。
今年も頑張って連載しますので、よろしくお願いします。

## かずみの女子中学生編　レイプされかけた時

かずみは性犯罪体験者である。

それは多感な中学二年生のある時、学校の校舎の裏へ、一人の不良少年に追い詰められた。

かずみの顔を何度も殴り、顔には傷ができた。そして、思い切り腹を殴られ、抵抗する気もなくなって、あまりの痛さで地面に横たわったときに、制服のスカートがめくれ太ももが露出して、かずみの太ももに膝蹴りを入れられた。

強烈な痛みのため、大きな声で悲鳴を上げた。

その時、中学校の女子たちがクラブ活動に行く準備すととき、かずみの悲鳴を聞いて、校舎の裏に来たのは、数人の女子中学生である。

「あんた、何しているの！」と、ある女子中学生が大きい声で叫んだ。

「おまえたちに関係ないだろう！」と、ひとりの不良少年が叫んだ。

その時、数人の女子中学生と、一人の不良少年が言い争いになり、かずみをレイプするところではなくなった。

かずみは、レイプされかけたとき暴力を受けたため、泣き続けた。

顔には殴られた跡があり、口から血が出ていた。

そして長い髪の美しい女子中学生が、かずみを介抱した。

「思い切り泣きなさい。私の肩で・・・・。」

かずみは激しく泣き続けた。

一人の女子中学生が、たまたま防犯のための携帯電話を持っていたので、１１０番に連絡した。

かずみは泣きながら、髪の毛が長い女子中学生のシャンプーと石鹸の臭いを感じ取った。その時から、かずみは女性に目覚めたが、逆に男性を強く嫌悪するようになった。

そして、まだ泣いている、かずみを中学3年の先輩の女子に連れられ、保健室に行った。

顔が殴られ傷があり、鏡で自分の顔を見たとき、心の中で「女の顔を本気で殴るなんて男なんて大嫌い！」と思った。それ以来、男性を嫌悪するようになった。

上級生の美しい女子は、かずみを介抱し続けた。

かずみの目は涙で風景がにじんで見えたが、ハンカチで目を拭くと、とても美しい上級生が目の前で優しそうな表情をしていた。

かずみは「男は乱暴で暴力振るうが、女性は優しい」と思った。

その事件以降、学校では大問題になり、かずみをレイプしようとし

た男子生徒を警察へとつきだした。
新聞の片隅の記事に書かれた。

## 女子中学生編　男の子のように髪の毛をバッサリ切って

かずみがレイプされかけて時から1週間、学校を休んだ。

顔には絆創膏が貼られた。鏡で自分の顔を見るたんびに、心に傷が付き、そのたんびに若い男性を憎むようになった。

「男なんて大嫌い！乱暴で！」と独り言を鏡の前で言った。

徐々に顔の傷が目立たなくなったとき、かずみは理容店で髪の毛をバッサリ切った。

レイプされるまえの、かずみの髪型とは、セミロングで目の前に髪の毛がかかるほど前髪が長く、いかにもフェミニンな雰囲気だった。それを耳が出るほど短くバッサリ切ったら、まるで、とても大人しそうな少年のような顔だった。かずみのボーイッシュ化はそこから始まる。

その間、警察署に出向き、どのようにやられたのか刑事さんに何度も同じことを言わされうんざりした。嫌なことを何度も思い出される嘆美に、男性への嫌悪感が強くなる。

そして、1週間後に学校にかよった、かずみの姿は痛々しいものだった。

両膝に包帯がまかれ、顔や腕には、まだ大きな絆創膏がついていたからである。

無邪気になって、かずみをからかう男子がいたが、その時、クラス

メートの女子は、その男子を叱った。いつもと同じように授業が行われた。

担任の先生は「かずみさんは、今、心に大きな傷があるので、あまり、それに触れないように、してください」と注意した。

「で、来年も君たちは受験が始まります。だから今のうちに、進路を決めてください」と言われ、

かずみは、「絶対に女子高！」と思った。

でも、女子高で、かわいいらしいミニスカ制服の女子高はほとんど無く、かずみの偏差値に相応しい女子高は、スカートは膝丈厳守の女子高ばかりである。かわいらしいミニスカ制服の高校だと、ほとんどが男女共学なのである。

「スカートの長さではなく、うざい男子がいない女子高に入学するわ」と、かずみは自分の進路を決めた。

## 女子中学生編　先輩の香りが最高

かずみがレイプされかけた事件以降、かずみの成績が低下しはじめた。
もともと、かずみは学業は優秀であった。
心優しい3年生の先輩の女子は、かずみの家まで来て、勉強を教えた。
「先輩、次の日曜日には、先輩の家に行っても良いですか」
先輩は美しい長い髪を、いじりながら答えて「かずみちゃんなら、歓迎だわ。いつでも来て」
かずみは先輩の頬にキスしたい衝動に駆られたが、キスする勇気がなかったのでできなかった。
先輩からのシャンプーと石鹸の臭いがした。
「言いにくいけど、あの事件での心の傷は治っているの？」
「いや、まだ癒されていない。むしろ男子すべてが憎らしく感じるようになった」
かずみは、先輩が勉強を教えに来るたんびに、女性に興味を持つようになった。
かずみにとって女性は、とてもソフトで優しい。

髪の毛を思い切り切った、かずみの顔は少年のような顔だった。

かずみは成長途中であり、中学2年で身長は１６６センチになった。

「わたし背が高すぎて、全然、かわいくない」

「そんなことないわ。かずみちゃんの顔はとても優しそうだし、大きく見えないわ」

そしていつものようにジーパンとTシャツを着ている、かずみの姿がある。

## 女子中学校編　かずみ先輩に恋する

中学3年の先輩を考えると胸が熱くなる。

そう考える中学2年の、かずみがいる。徐々にレイプ未遂事件に受けた傷は治ってきている。

そして、もう二度とセミロングの長い髪にすることはないだろうと思った。

かずみ１４歳は、セミロングの髪型にすれば、アイドルのような雰囲気があるが、それが原因でレイプされるくらいなら、耳が出るほどの短い髪型で十分だと思った。

だが、背が高い、かずみは男子のような服を着ると、遠くから見ると男の子みたいに見える。

男の子と間違えられないために、あえて持ち物はかわいらしい物をつけている。

カバンには、ちょっとしたかわいい飾りがあり、膝丈の長さのスカート制服でも不自然ではない。

かずみは考えた「先輩を抱きたい・・・。そして口づけをしたい」

だが、後輩の私が、いきなり抱きついたり口づけしたりしたら、先輩は驚いて去るだろう。

学校の教室の窓から遠くの景色を見ているとき、太陽の光は西に傾いた。

「かずみ、なに考えているの」と女子のクラスメートが話しかけた。

「ボク、ちょっと考え事していたの」と、いかにも、おとなしそうな男の子のような表情で答えた。

「はては、誰かに恋しているのかな？ねえ、だれが好きになったの？恋すると心の傷が癒されるからね」とクラスメートは無邪気にしゃべった。

『ボクは、先輩（女の子）が、とても好きなんだ・・・』と、とても小さな声でつぶやいた。

クラスメートは、その声が聞こえない。一緒に帰るように誘そわれた。

「ボクは、先輩を愛している」そう考えながら、クラスメートと一緒に帰ることになった。

かずみが怪我した時、優しく介抱してくれた上級生の先輩は、髪の毛がとても長く顔も美しい。

そして、石鹸の臭いがして清潔感を感じた。かずみは次第に、同性に対して興味持つようになった。

## 女子中学生編　かずみ体育の着替えに興味を持つ

かずみは気が弱いが体力がある。だから、運動することが好きである。

中学校では体育の授業があり、二つのクラスが男女に別れて、着替えをするとき、今までよりも女子の下着や体型に感心をもつようになった。

女子の学生服から体操服に着替えるとき、どんな下着がかわいく、かっこ良いのか、他のクラスの女子の下着姿を見るようになった。

『パンツはでかすぎないほうがかっこいい』とか『寒い季節以外なら、キャミやタンクトップは必要無い』と考えながら、女子の下着に感心をもつようになった。これが男子中学生だったら変態という烙印を押される。

『もう中学2年になれば、幼稚っぽいパンツを穿けば笑われる。ボクも下着に、もっと興味を持つべきだ』と、かずみは考えた。体育の授業は、かずみにとってとても楽しい時間である。何をやっても、一番だからである。

「かずみったら、とても力があるのに、なんで気が弱いの」と良く言われる。

「気が弱そうだから、どんなに体力があっても変な奴にやられそうになるのよ！」とある女子のクラスメートから言われたとき、かずみは泣き出した。

「ごめん、もう泣かないで」とハンカチを差し出され、涙を拭いた。

かずみの中で、まだまだ心の傷が治っていないのである。

体育の成績は良く、そして他の学科の成績が良いので、公立の学校を受験しても大丈夫だと思ったが、かずみはどんなに偏差値が高くても、男女共学は嫌だと思った。

『ボクの顔を殴った男を地獄の底に落としてやりたい！絞首刑では甘すぎる！』と過激な考えをもち、それを考えながら行動すると下手な男子よりも力がある。もともと体力がある、かずみは、いろんな運動部から誘いがあったが、女子だけの部活をしても、しごかれるとすぐに止めてしまうのである。厳しく指導されると、すぐに気を悪くして辞める。だから、体力があるわりには、気が弱いというところがある。

だから、レイプ未遂される前に、ある男子生徒と腕相撲をしたとき、すぐに勝ってしまうのである。

ずば抜けて体力があり、本気を出せば、たいていの男子と殴り合いの喧嘩しても勝てるが、気がとても弱い。

お正月が過ぎ、もうじき中学3年になるときには、かずみの身長は１６８センチまで伸びた。

## 女子中学生編　体育祭で

かずみは、体力も学力も高いため、多少イレギュラーなところがあっても、いじめの対象にならない。
中学生の女子の平均身長よりも高く力があるから、もし怒らせたら怖い物を感じさせる。

だけど、かずみはとても気が弱く泣き虫である。

初夏、かずみが不良少年にレイプされかけたとき、両膝に傷があり、顔も殴られた跡があったが、治りが早く、体育祭の季節になったときには、傷がなくなっていた。

走る速度が速く、常に1位である。

それを嫉妬して、かずみを憎む女子もいる。全ての女子が性格が良いとは限らない。

「かずみと言う女、体育祭のとき、いろんな競技で1位とるなんて。なんか、生意気じゃないの」という陰口があった。だが他のクラスメートの女子は、かずみを味方にした。

「ねえ、かずみ。陰口など気にしないで、思う存分、この体育祭で活躍しなさい」と励まされた。

「ボクのことを、嫉妬している女子もいる。そう言われても、本気だす気がないし・・・」

「かずみ。体力があるのに、何故、いつも弱気なの」と言われ、か

ずみは涙目で「そんな、ボクのことをせめないで」と答えた。

他のクラスメートの女子は「かずみはサバイバル訓練でもしないと、あの気の弱さは治らない」とつぶやいた。「学力と体力がいくら強くても、気が弱ければ社会で通用しないし」という声も聞こえる。

その時、中学3年の美しい先輩が励ました「いろんな声を気にしないで頑張りなさい。かずみちゃんは、この世で一人だけしかいないから、自分の個性を大事にしたら」と言われ、周囲の嫉妬や陰口を気にしなくなった。

そう励まされた、かずみは先輩を、より愛するようになった。

『先輩は、なんて心が優しいのだろう。ボク、先輩を抱きたくなった』と、かずみよりも身長が遥かに低い中学3年生の心優しい先輩は、とても華奢な体型をしていた。

長い前髪が目にかかる。ボーイッシュな髪型の、かずみは気弱な表情をしていた。

でも、かずみに対してさまざまな声があった。「かずみたら、あれだけの体力があるから、なにかスポーツでもやらせたら、良い選手になれるのに。なんだか体育祭だけの活躍ではもったいない」と言われた。

かずみは、勇気出して反論した。「ボクは、痛いのも厳しいのも嫌なだけなんだ！」その一言で、誰も、かずみに自分の意見を押しつける事をしなくなった。

## 女子中学生編　かずみ　最初の失恋

体育祭が無事に終わり、後片付けをした。

かずみは、まだ体操服を着ており、着替えが終わった後の先輩に話しかけた。

そして、中学3年生の先輩とおつきあいしたいと考えた、かずみは勇気出して、先輩に告白しようとした。

「先輩・・・」

「なあに？」

「先輩・・・」

「なんなのぉ？」

「ボ、ボクは先輩のことが・・・」と次の言葉が見つからない。頭の中が真っ白である。

「えーと、ボクとおつきあいしてください」

先輩は笑った「かずみちゃんたら、今でも私とつきあっているでしょ」

かずみは勇気だして本心を告げようとした。

「ボクは、先輩のことを愛しています」

それを聞いた先輩は、唖然となり、しばらく沈黙の時間があった。

先輩も、何を言って良いのか判らなかった。

優しい口調で「どういう意味なの？」と質問され、

「ボクは、友達としてでなく・・・」と、かずみは言ったとたん、

先輩はちょっと冷たい口調で「ごめんなさい。私、高校受験があるから・・・」と言って、その場を去っていった。なにか冷たい雰囲気を感じた。そして、その場に居づらい雰囲気になり、かずみも、その場を去っていった。

まだ中学生、「百合」という単語さえ知らない。

普通の女子中学生は、同じくらいの歳の男子にしか興味ないのは当然である。

そして、かずみは何故か悲しくなって、誰もいないところで、わんわん泣いた。

まるで、いじめられた小学生の少年が泣いているみたいである。

体操着のハーフパンツからハンカチを取り出し、涙を拭いた。そして、かずみは女子の着替えの教室に向かった。

西日が強く差した教室で、一人で制服に着替えた。

## 女子中学生編　かずみ「百合」情報を得ようとする

体育祭が終わり、かずみは最後に女子が着替える教室から出た。

用務員のおじさんが「もう誰も来ないですね。君が最後だね」と確認の言葉をかけた。

なんだか、とても寂しい気持ちを感じた。

いかにも中学生らしい制服、膝丈の長さのジャンバースカートを履いている。紺色のソックスを履き、上履きで誰もいない中学校の廊下を歩いた。出入り口の靴だなで、自分の靴を履いて家路に帰った。

家に帰ったとき、シャワーを浴び、髪の毛にはタオルを巻き、とてもラフな服装、大きめのTシャツにジャージに着替え、かずみの母親に相談を持ちかけた。母親は、まだ４０代前半でモダンな考え方をしている。

「かずみちゃん。なんだか元気ないみたいだけど、相談ってなんなの」

「ボク、実は失恋したの」

「あら、だれか良い男性（ひと）がみつかったの？例の男性恐怖症も治ったの？」

「そうじゃなく、同性で、中学3年生の美しい女子の先輩に、恋人のようにおつきあいして欲しいと告げたけど・・・」

かずみの母親は、少し考えて慎重になって、答えた。
「かずみちゃん。その気持ち、私も少し判るような気がする。思春期では、思いがけないことがあり、たいていの親は、その悩みをまともに聞かない。でも、たとえ世界中が、かずみの敵でも私、かずみの味方だからね」と真剣な表情で、かずみを見つめた。

「でも、また中学生、女同士のカップルは、ちょっと早すぎるのではなかったの？」

かずみは「私、もう女しか興味ないし女しか、愛せられなくなった。あのレイプ未遂事件で、本気で殴られ続けて、もう私の心の傷はなおらない」

かずみの母親は、「かずみ。同性しか興味なくなったのは、あんな酷いことされたから仕方ないよ。でも、私、かずみのことを信頼しているから、いつか立ち直って、かずみにとって最も幸せになることを、望むよ」

かずみは、母親の優しい言葉を聞いて、大きな身体に似合わず、わんわんと泣き出した。

中学生の女子としては、大きな身体。それに反比例して、精神的には脆弱なところがある。まるで、気弱な少年のように見える。

かずみの母親は、とてもおとなしい息子に接していると錯覚した。

「ママ、ボクの率直な意見に答えて。女の子が女の子を恋する、愛し合うことはいけないこと。悪いこと？」

そう言われて、かずみの母親は何と答えて良いのか解らなかった。

「今は結論が出ないから、ふたりで考えましょう。母親である私にとって、かずみは良い子に育った。素直だし、勉強もスポーツも一生懸命やっているし努力家だし、私、かずみのことを、誇りに思っている」

そう言われて、「ボク、ママに相談して良かった」と答え、

紺色のジャージ、紺のTシャツ姿の、かずみは耳が出るほど短い髪型であり、顔が、とても大人しい少年みたいだった。女らしい少年の顔をしている。前髪が長く、目に髪の毛がかかるのではないかと思うほどであった。少女というよりも、家にいるときの、かずみは頼りなさそうな、少年そのものだった。

少し時間がたち、お父さんのパソコンを触らせてもらった。

「百合」に対する情報を得ようとしたが、当時は、どこの書店に行っても「百合」情報はほとんど無かった。

そして、パソコンを起動して、マウスでインターネットに接続するとき、永遠と思えるほど長い時間を感じた。「ピポパ」という電話機をかける音がして、モデムから「ビギャー」という音がした。ダイアルアップでブロバイダーのアクセスポイントに繋がった。

「レズ」をキーワードにして、自分の悩みを知ろうとした。

## 女子中学生編　高校進学を考えて

中学2年のかずみは、もうじき高校受験があり、一生懸命勉強をしていた。
深夜1時に寝るとき、いくつかの女子高のパンフレットを読んだ。
かずみは女の子、かわいらしい制服の女子高のパンフレットを見るのは、まるで、ティーン向けのファッション雑誌を見るような感覚である。

かずみの希望は、できれば親に負担をかけたくないから公立を、そしてなるべく近いところの高校に進学したかった。まだ中学2年、将来何になるか明確なビジョンが無い。テレビでは、失業問題などとり上げられており、せっかく良い学校を良い成績ででても、非正規社員になる人が多い事も知っている。だから、曖昧な気持ちで、「正社員になれれば何でも良いわ」と考えている。

その結果が、大企業のＯＬになることを、まだ知らない。

新春を過ぎ、寒い季節に、近所のコンビニまで、わずか5分である。コンビニに行き少年向けの漫画雑誌を一冊買った。漫画に興味があるのではなく、最初の女性アイドルの水着姿を見たいからである。

だから、毎週、買う雑誌の種類が異なるのである。

女性アイドルの水着姿をみて、かずみはムラムラしてくる。
一生懸命勉強した私へのご褒美として、週に一冊の漫画雑誌の女性アイドルの水着のグラビアは、かずみのたのしみである。

パジャマに着替える前に、自分の部屋でパンツ一つだけになり、水着のグラビアを見ながらオ○ニーをする、かずみは、完全に同性愛者になっているのである。

「ボクって、なんて穢らわしい女の子なの・・・」と、パンツ一つでベットで横になり、女性の水着姿を見てムラムラする自分に罪悪感を感じると、涙を流しながら、オ○ニーをするのである。

深夜2時、かなり遅い時間になり、朝、起きて学校に行かないといけない。

それを自制しても、目に焼き付いた水着姿があり、パジャマを脱いで、またオ○ニーをする。

そして、夜中の3時近くになると、これはやばいと思い、身体も疲れたので、確実に目覚まし時計が鳴るように確認して、蛍光灯をの光を消して眠った。

そのところが、まるで中学生の男子みたいなのである。

朝7時に目覚まし時計の音がして目を覚まし、かずみは中学校の制服に着替え、ダイニングキッチンへと行った。そして、ママが作った朝食をたくさん食べ、かずみは、ママと今後の進路について話し合った。

「ボク、制服がかわいい女子高に行きたい」

かずみの母親はクッスと笑い「かずみ、制服のデザインだけで選ぶのではなく、どんな授業をするかでしょ」と言った。かずみの父は、長距離通勤のため　かずみが起きる前に、家を出た。

「かずみ、私たちに遠慮しないで、私立の学校でも良いのよ。そのためにお父さんは、夜遅くまで働いているから」

成熟した考えをもった、かずみは、感銘し「パパも一生懸命頑張っている。だから私も頑張らなければ」と言って、朝食を食べたら、中学校に向かった。

## 中学生編　ママに水着の切り抜きを見つかった、どうしよう

中学3年になった、かずみは皆が受験勉強のために一生懸命頑張っているから、授業の内容が難しくなってくるのである。

中学3年になると、みんな高校進学を目指し、授業中の教室は、私語もなく、まして授業中に寝る生徒はほとんどいないのである。

かずみは授業中は、とても真剣な目をしている。中間テストでは1点でも、5点でも良いから良い成績を取りたいと言う気持ちになっている。だから、中学3年になると、夜になると勉強するから、ほとんどテレビを観なくなる。

かずみは自分の両親の期待に答えようと必死なのである。

かずみの母親は、夜食を作ったり、またお茶を持ってきて応援した。問題集や参考書を何度も繰り返し読み、自分に満足行くとき、自分へのご褒美として、切り抜いた水着の写真をクリアファイルに保存した。漫画雑誌はすぐに捨てた。

かずみの母親も、週に4日、パートとして働いたが、金曜日の休日、かずみの部屋を掃除したとき、クリアファイルが本棚から落ちた。それを見たら、ほとんどがビキニ姿の女性アイドルの写真ばかりだった。

かずみの母親は、まさか本気で、同性愛に目覚めたことに悲しんだ。それを見て見ぬふりしようか、それともじっくり話し合おうか迷っ

た。変に刺激して自分の娘を傷つけるわけに行かない。でも、母親として悲しい気持ちを感じた。

その時、かずみが中学校から帰ってきて、制服を自分の部屋で脱ぎ、私服に着替える前に、かずみの母親は真剣な表情で、何か話し合いたいと思った。かずみも、もしかしたら女性アイドルの写真の切り抜きを入れたクリアファイルのことではないかと感じ取った。

かずみの母親は、かずみにお茶をだし、それから、しばらく沈黙が続いた。

母親の表情は険しい。かずみは半分、泣きたい気持ちを堪えた。そして、かずみの母親が口にしたのは、「私、道徳とか宗教的な倫理観を、かずみに押しつけるつもりはない。でも、どうして、かずみは女の子なのに、女の子そのものに興味を持つようになったの？」それ以上言うと、かずみの心を傷つけることになるので言いたいことを我慢した。

かずみは、しばらく涙目になり、我慢できなくなって、突然「わーん！」と泣いた。

「かずみちゃん。言い過ぎたかしら」かずみの母親は気にした。

「だって、ボク、女の人しか愛せなくなったの・・・。それが、悪いことだと思っても、もう辞められなくなってしまって」と泣きながら言った。

「かずみ、愛の形はいろいろあるから。もう少し冷静になって考えましょう」と言い、ついうっかりと母親としての本音も言った「でも、かずみは、とても優しい男の人と結婚して、美しい花嫁になることを夢みたの」と言われ、かずみはまだ中学3年生、結婚のこと

は全然考えたことはない。

かずみは涙を流しながら「ママ、それって、ボクの価値観を否定して、ママの価値観を強要しているのでないの」と大きな声で言った。

かずみの母親は、どう答えていいのか解らず、柔軟に考えた末、かずみに謝った「ごめんね。かずみちゃん。ママが悪かった。愛にもいろんな形がある」と、泣きながらかずみの肩を抱いた。

親子二人が一緒に泣いている。

しばらく、気を取り戻した、かずみは、「ママ、ボクの作ったピンクのクリアファイル捨てて」と言った。かずみの母親は「なぜ大事なクリアファイルを捨てる必要があるの。かずみの大事な物でしょ」と言った。かずみの母親は、本気になって同性愛者になったことは、もうしかたないことだと思った。あの事件がなければ、普通に異性に興味を持つようになる年頃だと思った。かずみの母親は、それを考えると、かずみを襲った不良少年が殺したいほど憎らしく感じた。

そして、かずみはピンクのクリアファイルを胸に抱くような恰好で自分の部屋に入った。

## 女子中学校編　かずみに恋人（？）ができた

中学3年になり、クラス替えが行われた。

かずみを優しく介抱した先輩は、もういない。

同じクラスで、やや言葉使いが悪い女子がいた。彼女は、某宗教団体の聖職者の娘である。名前は杏子。

実は杏子も中学生でビアンになった。学校でも家庭でも、いろんな規則づくめの生活に疲れ、女性の肌に強い興味をもち、そのため、かずみと同じビアンとなった。

杏子は、勉強ができない不良グループにも、真面目なクラスメートのグループにも属しない孤立した女子である。

かずみは休憩時間でもノートや教科書を読んで勉強しているので、杏子は、かずみに感心をもつようになった。「ねえ、何やっているの」

「ボク、いま勉強中なんだ」

「へえ。真面目なんだね」

そして、かずみの短い髪の毛を触った。「あんた、もっと髪の毛を伸ばしたら。黒い髪の毛も良いわよ」と言った。「ボク、去年、あのおぞましい事件があったから、もう髪の毛を伸ばさない」と答えた。

杏子は、かずみの髪型、いかにも少年という顔しているのが気に入

った。

かずみが休憩時間でも勉強しているとき、話しかけ「ねえ、あたしあんたのこと興味あるの」と言われ、かずみは心の中で「もしかして・・・・・。ボクに気があるのかも・・・」と思った。

杏子は、かずみに放課後、体育館の裏に来るように伝えた。

午後3時、学校の授業が終わって、これからクラブ活動をするクラスメートがいれば、急いで家に帰って、勉強に精を出す生徒もいる。

杏子は、かずみの腕を掴んで、「私と一緒に、体育館の裏に行きましょ」と、二人は人目がほとんどいない体育館に行った。

杏子は、初めに、少し緊張した。「あんたって、ちょっと、かわいい顔しているから・・・」と、緊張しながら話し、「ねえ、あんたのこと好きなの。だから、ほっぺにキスさせて」と言ったとき、かずみと同じビアンだと思って、かずみはいきなり、杏子と口づけをした。

膝丈の長さのジャンパースカートの制服の少女二人が、抱き合うような恰好で口づけをした。

杏子は恥ずかしさを隠すために「ばかやろう！そう簡単にファーストキスをするじゃない。あたしがして欲しいのは、ホッペにキスしろと言うことだ」杏子は顔を赤くした。

かずみと杏子は、お互いにファーストキスをした。それも女の子同士で。

かずみは、「言われた以上のことして、ごめんなさい」と謝った。

杏子「あたしを好きにしていい」と言われ、かずみの大きな身体で、身体が小さな杏子を強く抱きしめた。「痛い。お前、女子プロレスラーか！抱くならもっと優しく丁寧に抱け」と言われ、かずみは力を抜いて、杏子を抱き続けた。

かずみにとって初めてのレズ体験だった。

杏子は吐き捨てるような言い方で「おまえのケータイの電話番号を教えろ！あたしとお前との親友の証に」

かずみは、まだ携帯電話を持っていない。「ごめんね。ぼく携帯電話もっていないの」とめそめそした表情で答えると、「なにめそめそしている。今は女が強い時代だぞ」と、かずみの肩を軽く叩き、杏子は、いきなり口づけをする、かずみの意外性に興味を持った。

杏子は、自分の携帯電話の番号を、かずみに教え、その場から去った。

## 女子中学校編　かずみの青春が始まる

杏子という少し変わった女の子を抱いた、かずみは意外と身近なところで、私と同じ同性愛者がいることに感激した。そして、はじめて女同士で抱き合い口づけをしたので、気持ち良かった。

「あら、かずみちゃん。最近、明るくなったじゃないの。受験というたいへんな時に」かずみの母は言った。「なにか良いことあったの」

かずみは、先日の心苦しい出来事のトラウマがあり、女の子の親友ができたことは秘密にした。

それで「ちょっとだけ、良いことあったの」

「そのちょっとした良い事って何なのよ」

「ママ、ボクのことを詮索しないで」

「ごめん、ママが悪かった。でも、私、かずみのこと信頼しているから」

と言って、お茶を入れた。

杏子から渡されたメモ、それには、杏子の携帯電話の番号が書かれている。

お互いに電話番号を教え合った。

そのとき電話が鳴った。

「かずみ、杏子さんから電話あるけど」

かずみは、喜んで受話器を取った。

「ねえ、かずみ、急な事なんだけど、近くでお茶しない」

「もちろん、行くよ」

「では、３０分後に駅前近くの喫茶店で待ち合わせしましょ」

と電話が切れ、もっと話したいと思い、かずみの母親に「ママ、緊急時に使える携帯電話が欲しいけど」と言った。

「でも料金が高いし、ちょっと考えるわね」

「なるべく早くお願いねえ」

「しょうがないわね」

かずみは、ジーンズの長ズボンを履いて駅前の喫茶店に向かった。

５月、気温の変化が激しいので何を着ていけばいいのか判らない季節だった。

そんな季節でも、杏子はジーンズ地のホットパンツを穿き、ロングブーツを履いている。赤茶色の長い髪の毛をポニーテールでまとめている。

「ちょっと待ったぁ」

「大丈夫、5分くらい遅れても大丈夫」

二人は、喫茶店に入り、いろんな話しをした。

「うちのパパは、堅苦しいしるしい。なんたって、あたしは牧師の娘なんだもの」

「教会関係の家庭はたいへんだね」

「まあ、その反動で今の、あたしがいるわけで、実は、言いにくいことだけど」

と、杏子の声は小さくなり、

「これは秘密だけど、あたし女の人の裸を見るの好きなの。こんど隣の駅前に近代的なスーパー銭湯ができたの。こんどの土曜日、わたしたち二人で言ってみない。それから、かずみ、市民体育館のプールにも行かない？」と誘われ、かずみは二つ返事で「行く行く」と返事した。

杏子は、大人らしくブラックのコーヒーを飲んでいて、かずみは、いかにも女の子らしくジュースを飲んだ。

「ボク、ママに携帯電話を買ってもらうようにお願いした」

「かずみのママは、話しが解るから良いよなぁ。家は教会関係の家庭だから何でもかんでも聖書なんだし」

「教会って、そんなに息苦しいところなの？」

「明日の日曜日に私のパパが説教する教会に来てみれば。でも、まともに話しを聞くと、罪悪感を感じるだけだし。とても堅苦しいから。そのあと、近くにある市民体育館のプールに行きましょ」と言われた。

スーパー銭湯でも市民プールでも、杏子の肌が見られる。かずみは、杏子の初めての印象は、いかにも柄が悪そうな不良少女だと思ったが、かずみにとっては無二の親友だと思った。

ふたりは、しばらく話し合って、それから喫茶店を出た。

「ここのコーヒーは美味しい。パパもよく使っているから」と杏子は話した。

かずみは杏子の太ももをみて「でも、杏子ちゃんの脚、長いね」と言ったら、杏子は顔を赤くして「恥ずかしいこと言うな！」と照れながら、かずみの背中を叩いた。

「杏子ちゃん。次どこに行く」と言って、二人は手を握って歩き、近くの公園に行った。

## 女子中学校編　クラスメートからの忠告

かずみと杏子が、つきあっているという噂が広まった。

あるクラスメートは、かずみに一言、忠告した「かずみ、あの杏子とつきあっているのは本当？あの子だけは止めなさい」と言われた。かずみは半分、ムカついた。気を悪くしたが、反論する勇気がなく、ただ黙っていた。

真面目で勉強ができるクラスメートからも、勉強ができない不良っぽいクラスメートからも、かずみと杏子は、変な目で見られている。「友達つきあいの自由はあるのに」そう思う、かずみが居たが、それを打ち破る強さがない。

杏子はクラスで、もともと孤立している。もともと孤独になれている少女である。

ある日の朝、かずみの下駄箱に、一つの手紙があった。それは杏子からの手紙である。

靴を履き替えて、それを読むと『あたしたち、今、変な目で見られている。しばらく学校では話し合わないことにしよう。で、あたしのパパの教会に来てね。別に宗教的な勧誘でなくゆっくり話し合いたいから。杏子より』と書いていた。

その手紙には教会への地図が書かれている。そして、日曜日に教会に行った。

かずみが想像していた教会とは、全然、雰囲気が異なっていた。

激しいリズムで演奏される賛美歌。若い人が意外と多いこと。「アーメン」「ハレルヤ！！」と叫び声が聞こえる。

１０時半になると、杏子のパパが背広にネクタイの恰好で、新約聖書「ローマ人の手紙」の説教して同性愛はいけないことを強調する説教をした。はじめての教会の印象は、かずみにとって良くなかった。

『これじゃ、杏子ちゃんも反発するわけだわ』

その時、後ろの席に杏子がいて、二人は一緒に座っていた。話の内容は「同性愛は悪だ」という内容だけで、なんだか堅苦しい内容しか覚えていない。お昼になり、教会のキッチンで昼食会があり、はじめて来た、かずみが紹介され歓迎された。

いろんな人から話しかけられ、かなり緊張をした。

当然、若い男性からも話しかけられ、「男性でも教会に行くのか」と思った。

杏子とかずみは隣の席で食事をして、そして、食事を食べ終わった後、近くの公園に行った。

「ぼくたち、もしかしたらレズだという噂がある。だから、みんなから杏子だけつきあうなと言われて、ぼく、とてもつらい。何も言い返せない」と涙目で杏子に話しかけた。

杏子はやや厳しい口調で、かずみに言った「だれがつきあおうとも、あたしたちの勝手だろう！そんなことで負けていたら、これから生きていけないだろう。しっかりしろ！」と、背中を強く叩いた。

「でも、ぼくたちの仲を切り裂く力が働いているのだよ。なぜ同性愛はいけないの？愛にもいろんな形があっても良いのだよ！」と、力強く言った、かずみがいる。

「そうだ。そうだ。かずみ、今の勢いで私たち燃えつきるまで愛し合いましょ」と杏子は言った。

確かに、かずみと杏子の仲を切り裂く力が働いている。

## 女子中学校編　かずみ再び男性から乱暴される！？

かずみは、周囲が金網に囲まれたリングサイドにいる。ボクシングに使う短パンとランニングシャツを着て手にはグローブをはめ、ボクシングにつかうシューズを履いている。

周囲には、気が荒そうな男性たちがたくさんいる。

かずみに卑猥な言葉を投げかける。

かずみは、なぜ、その場所にいるのか理解できなかった。ただ怖いだけである。真ん中に、かずみが震えて立っているのである。

その時、スキンヘットのレスリーが「これから３０分、完全デスマッチをします」と宣言した。

そして金網の部屋に、モヒカン刈りで筋肉がりゅうりゅうの若い男性が入って来た。

まるで獣のような目をして、かずみを睨んだ。目が合い、恐怖を感じた。

ゴングがなり、モヒカン刈りの男性がかずみの顔にパンチを食らわせようとした。

かずみは、それを何度も避け続けた。

非常におそろしい。

そして逃げるようにして金網まで逃げ続けた。
金網に腕が当たると、金網ごしから、かずみの腕を強く捕まれた。
何人もの男性の腕が、かずみの腕を押さえ続けた。
どんなに力をいれても、かずみの腕は全く動かない。その場所から一歩も移動できない。
そのモヒカン刈りの筋肉りゅうりゅうの男性は、にやけた表情をして、かずみの顔を本気で殴りつけようとして、手につけたグローブを外した。
そして殴られる瞬間、かずみは死ぬまで殴られ続けるのを覚悟した。
恐怖で悲鳴を上げた。

周囲は真っ暗である。
時計の音がしてる。
かずみは悪い夢を見たのである。
怖くって震えている。かずみはまだ中学3年生。かずみの母親が、目を覚ました。
「どうしたの？」かずみの母親は訪ねた。
「ぼく、とても怖い夢を見たの」半分、泣きそうな声で答えた。
かずみの母は、蛍光灯のスイッチをいれた。

「ぼくが、ボクシングのディスマッチで殴り殺されそうになる夢をみた」

耳が出るほど短い髪の型をした少女である、かずみは、たよりない少年のようだった。

長い前髪は完全に目を隠すほど長い。少年のような目をしている。たが、まだ中学3年の少女にとって、とても怖い夢だった。中学2年の時、ある不良少年に乱暴され顔を思い切り殴られたときの記憶が潜在意識の中に入っているからである。

かずみの母親は、温かいココアを作り、それを飲むようにすすめた。

「ぼく、とても怖そうな男の人に、殴り殺されそうになった夢をみたの。とても怖かった」

「もう大丈夫だわ。いま早朝の4時半だわ。これから寝ても・・・」

「ココア飲んだらベットで横になるだけでいいわ。わたしが朝まで一緒にいるから」と、かずみのママは、しずかな口調で言った。かずみの父親を起こさないためである。

## 女子中学生編　かずみの両親の苦悩

午前４時半、かずみの母親が、かずみの手を握り続け、かずみは安心したように再び寝た。
黒い前髪が長いため目にかかるほどである。

かずみの母親は、かずみが寝たことを確認し、手を離し、静にかずみの部屋をでた。

「身体の傷は癒えても、心の傷は深い」そう言いながら窓のカーテンを開けると、外は思ったよりも明るかった。

午前５時半、かずみパパが起きだし、会社に行く支度をしたとき、かずみママは「かずみは、今夜も悪い夢でうなされたの。たぶん、あの時に不良少年から乱暴されたトラウマがある」

かずみパパは「次の土曜日、いや金曜日でも良い。心療内科にかずみを連れて行ったらどうだろう」

「それでは、かずみが精神病みたいじゃないの」

「でも、そのまま、ほっと置けば、かずみの心が壊れ高校受験どころではなくなる」と言い、かずみママは反論できなくなった。

「土曜日だと精神科の診療所も込むから、金曜日に私が年休を取って、一緒に行く」

かずみママは、パパに言って良いことなのかどうか迷ったが、かずみが同性愛に目覚めた事を話した。

「言いづらいけど、かずみは・・・。かずみは、あの事件以来、異性に興味なくなって同性に強い関心をもつようになったの」

「なに！ほんとうか！」と、かずみパパは驚き大きな声で叫んだ。

「なんと言うことか！かずみの心が・・・。そこまで浸食されたとは」

「私たちが思っている以上、かずみは傷ついているの」

「それは、そうだ。女の子の顔に数カ所も傷が出来るほど殴られ、強姦されそうなら、そうなる」

そう言って、かずみパパとママは、かずみを襲った不良少年を何万回、身体中をメッタ刺ししてでも、気が済まない。二人とも激しい憤りを感じた。そして、永遠に自分の娘の花嫁姿が見られないということに絶望感を感じ、かずみママは泣き出してしまった。

「しっかりしろ」と、かずみパパは言った。

かずみママは「もう、かずみは永遠に結婚する気がないのよ。かずみは、女しか興味なくなったの！」と泣きながら言った。

「かずみは、勉強もスポーツもできる良い子に育ったのに。なぜ、あの子のように良い子が乱暴されなければいけないの」と大きな声で泣いた。

かずみパパは「そでは、私は今から会社に行くから、かずみのことは任せた。会社には、金曜日に休むことを連絡する」と言って、スーツにネクタイの姿で、出勤した。

かずみママは、今日はパートの仕事する気がなく、パート先の会社に連絡した。

## 女子中学生編　かずみスポーツ店に寄る

「ママ、おはよう」と、かずみの元気な声を聞いて、かずみママは少し安心した。

「夜、迷惑かけて、ごめんなさい。それで、お願いだけどお小遣いの前借りを」

と、普段良い子で、遠慮がちな、かずみは母親にお願いすることは珍しいことだった。

かずみママは、それよりも夜中、見た夢のことについて、話したい気持ちになった。

「かずみ、夜中、それも早朝に近い時間に、うなされたけど、もう大丈夫」

「ボクは大丈夫だけど。ボク、今、欲しい物があるの」

「何なの？」

「ボク、夜寝るときに着るタンクトップとショートパンツが欲しいの」

「でも、パジャマで十分じゃないの？」

と言われて、お小遣いの前借りは却下された。

さらに「かずみ、携帯電話も欲しいでしょう。そちらを優先的に考えているから」と言った。

かずみは、お年玉を貯め、そのお金で、タンクトップとショートパンツを買うことに決めた。
もっとお金を貯めたら、本当はミニコンポを買うはずだったが、一着でもいいから、夜寝るときに履く、タンクトップとショートパンツを着て寝たくなったのである。

かずみママは、なぜそれが欲しいのか理解できなかった。

かずみの本音は、女性アイドルの写真をみながらオ〇ニーするとき、どうしても、夜、見た怖い夢で、自分が殴り殺される夢の影響があり、自分でも解らないが、それ着ながらオ〇ニーしたいと思ったからである。

黒いショートヘア、それも耳が出ている髪型は、ちょっと髪の毛が長い少年と同じだった。
身長も１６７センチになり、少女としては背が高いが、気持ちは、たよりない少年と同じである。

「かずみ、あの事件以来、何度も夜中、うなされているわね」

「うん」

「かずみ、今度の金曜日、学校を休んで、病院に行きましょう」

「なぜ？」

「あの事件以来、頻繁に怖い夢みているでしょう」と言われ、

「病院に行けば、気持ちを落ち着かせる薬がもらえるし、夜も悪い夢をみないですむと思うから」

「ぼくは、まるで病人みたいじゃないの」と涙目で訴えた。

「かずみ、ママも本当は辛いの。でも、その苦しみを病院の先生に話すだけでも心が軽くなるから」と言われて、さらに、「帰りに、かずみと一緒に喫茶店で欲しいものは何でも買ってあげるから」と説得した。

そして、かずみは自分の部屋に戻り、貯金箱を開け、貯めた現金を全部財布に入れ、そして中学校に行く準備して、制服に着替えて学校に行った。

学校の授業が終わって、かずみはデパートのスポーツ店によったが、ボクシングに使うショートパンツがなかなか見つからず店員に尋ねたが、お店にはないので、そして代替えとして、デパートのティーンズ向けのお店で、ショートパンツとタンクトップを買った。

中学生の　かずみにとって高価な買い物だった。

## 女子中学校編　家族で診療所に行く

金曜日、かずみママとパパと3人で、心療内科の診療所に行った。午前中に診療所に着き、診療所の先生に、かずみが中学2年の時に不良少年に乱暴され、まだ心に深い傷があることを話した。最近は、頻繁に夜中に悪い夢を見ることを先生に知らせた。

かずみから先生に言った「ぼく、乱暴そうな男子から本気で何度も顔を殴られ、顔に傷ができたの。そしてお腹を思い切り殴られたとき立てなくなって、倒れたときに膝をコンクリートの床にぶつけて膝を怪我した。そして太ももを膝蹴りされたとき痛さで悲鳴を上げて、それ以来、頻繁にボクが、こわそうな男の人に殴り殺されそうな夢を良く観るようになった」と話した。

「先生、うちの、かずみは乱暴される前は、髪の毛が長いフェミニンな女の子だったですが、あの事件以来、かずみは髪の毛を思い切り短くしているのです。乱暴された心の傷がまだ根強く残っているのです」と、かずみママは話した。

「夜、ほとんど寝ていないとか、他に異常はないですか？」と診療所の先生は訪ね、そして「怖くって、おねしょをしたとかないですか？」と質問した。

身体が大きくても、精神的には脆弱な女の子である、かずみは、先生から見れば、精神的にまだ小学生（小学４年生程度）にしか見えない。

でも、かずみは少し気を悪くして反論した。「ぼく、子どもじゃな

いから、おねしょをしないよ」と、かずみは言った。

「それでは、精神安定剤を出します。その他に薬を出しますので、今後、定期的に来てください」と診療所の先生は言った。

かずみパパは黙っていた。

診察室から3人が出て行き、薬をもらい、そして、かずみパパは、本当は、かずみとゆっくり話しをしたかったが、仕事がたまっているので、午後から出社した。

「ごめん、かずみ。これから仕事しに行かなければならない。今日は、ゆっくり話しができると思ったが、話し会えなくってごめん」といって、そして、かずみパパは急いで会社に行った。

そして、かずみとママの二人は診療所の近くの喫茶店に寄り、かずみが食べたいものを注文した。

「失礼しちゃうわね。かずみ。おねしょをするなんて」

「ぼく、もう小学生ではないよ！」

「でも、夜寝る前には、薬をちゃんと飲んでね」

「ところで、かずみ友達関係では問題ないの」

「ぼく、今、親友が出来たんだ。杏子という子と。でも、クラスのみんなは『杏子だけはつきあうな』というからムカつくんだ」

「ねえ、杏子という女の子。うちに呼んでも良いわ。夕食をごちそうするから」と、かずみママは言った。

「で、杏子という女の子はどんな子なの？」

「ボク、初めは、勝手にボクの髪の毛をいじるから、ちょっと嫌な子だと思ったけど、つきあってみれば良い子だと思う。言葉使いが悪いけど、ボクに気があるみたいなの。それに案外、優しいところがある。なぜ、みんな杏子ちゃんを嫌うのか、ぼく、理解できないよ」と話し合った。

## 中学生編　女子ボクシングのショートパンツが良いわ

かずみは、午後7時半から午前1時まで、集中して高校の受験勉強をした。

雑念を払いながら、そして少しでも授業で習ったことを暗記するため忍耐がいる。とても疲れるが、将来のことを考えると、両親の期待にこたえなければならないと思って勉強する。

午前1時、かずみは勉強を終えて、着ている服を全部脱いだ。下着も含めて。

そして、全裸になって、ティーンズ向けのショップで買ってきたショートパンツとランニングのタンクトップを着た。

ノーパンでショートパンツを履いたとき、お尻全体に少し違和感を感じたが、気持ち良かった。

パジャマよりもランニングのタンクトップとショートパンツの着心地が良いと思った。そして寝た。

その日も、ガラが悪い少年に乱暴されそうになる夢を見た。

夢の中でも、このあいだ見た金網ディスマッチの時のような、ランニングと短パンの恰好である。とても怖そうな男の人に殴られそうになった夢である。夢の中では何故か怖く感じなかった。そして夢の中では、その怖そうな男の人が、急に美しい女性ボクサーに変身した。

「ぼく、こんな美しい女の人に殴り殺されるなら本望だ」と思った。

そして、夢の内容が、また変化した。

そして気がついたら朝になった。

目覚まし時計の音が鳴っている。午前7時を過ぎている。久しふりに熟睡したので頭がスッキリしている。

「寝るときは、パジャマよりもランニングのタンクトップとショートパンツがいいわ」とつぶやいた。

かずみは、その恰好のまま、ダイニングキッチンに行った。

かずみママは、「あれ、パジャマじゃないの。この恰好で寝たの。いつでもスポーツ出来る恰好しているわ」と言った。

「実は、この恰好で寝ると、怖い夢をみても、もううなされることがなくなったの。きれいな女子ボクサーがでてくるから」と、かずみは元気よく答えた。

かずみママは「今朝の、かずみはいつもよりも顔つきが良いわ。一着だけでは洗濯すると、またパジャマだから、今度買い物に言ったとき、いま、かずみが着ているのと同じような服を買うわ」と言った。

「でも、本当は、女子ボクサーが履くショートパンツがいいの」というと、

「かずみ、いま、家計がたいへんだから贅沢いわないで」と、かずみママは答えた。

## 女子中学校編　かずみ土曜日の休日

かずみは、休日だから、他のクラスメートみたいにお昼近くまで寝ない。

ランニングのタンクトップにショートパンツの恰好で、かずみママが作った朝食を食べ、そして、自分の部屋にもどり、受験勉強をした。

問題集を何度も説いて、少しでも学力を上げようと努力した。

かずみママは、近くのスポーツクラブに通った。だが、かずみパパは、今日も仕事である。

「たまには、パパとゆっくりお話したいわ」と、勉強中につぶやいた。

「来年は高校受験。ぼく、絶対に女子高に行く」と考えて、真面目に勉強をお昼までした。そして、自分でお昼を作り、それを食べた。かずみは料理が下手で、あまり得意ではなかった。それは、かずみママが料理が上手なので、毎日、美味しい物を作ってくれるから、自分で料理を作る必要がないからである。

そして、私服に着替えた。動きやすいように長ズボンのジーンズを履いた。

鏡に自分の顔をみて、中学1年の時のような、キュートさがなかった。「ぼく、髪の毛を短くしてから、男の子みたいな顔になっている」と、つぶやいた。

その時、かずみは杏子の携帯電話に電話した。
「杏子ちゃん。ぼく、かずみだけど。いま暇？」
「なんだよ！いきなり電話かけやがって！で、あたいと、どこか遊びに行きたいの？」
「ぼく、市民体育館の温水プールに行きたい。杏子ちゃん、大丈夫？」
「別にいいけど」と、少しぶっきらぼうな言い方をした。
「時間は、午後2時に市民体育館で待ち合わせしましょう」と、かずみが言った。
「その時間でいい」と杏子は答えて電話を切った。
かずみは、スクール水着を押し入れから取り出し、かずみの部屋の中で試着した。
「ちょっと、きつい。ぼく、身長が伸びたから。ＬＬサイズが良いけど。この水着Ｌサイズ」
そして他に水着がないか探したが、タンニキ水着しかなく、それだと市民体育館のプールで泳げない。
自分の全身を鏡に映し出し、変なところがないか確認した。
「ちょっと、水着がキツイのを我慢すれば良い」と思い、ビニールのバックに競泳型スクール水着を入れ、バスタオルと替えの下着を

入れた。他に髪の毛をとかすクシと目を守るゴーグルと水泳用の帽子を入れた。

「杏子ちゃんが、もしかしたら忘れるかもしれないから、もう一つ帽子をいれるわ」と予備の帽子を入れた。

午後2時少し前、市民体育館の前で、杏子がくるのを待った。

杏子は１０分遅れて来た。

「ごめん。待たせて」と杏子は自転車を乗って来た。ビニールのバックが自転車のカゴの中に入っている。現在は、5月後半、徐々に温かくなる季節。杏子はタンクトップに少し長いミニスカートを履いていた。服の色は、少し赤い。

「ぼく、大丈夫だよ。杏子ちゃん一緒に入ろう」といって、市民体育館の中に入った。

そして更衣室には、二人しかいないので、お互いがタオルで身体をプールの授業のように隠す必要がないので、そのまま、下着を脱いだ。初めてお互いの裸を見た。恥ずかしく感じなかった。

杏子は、かずみの胸を見た。Ａカップのブラでも、十分余裕があるほど胸が小さい。

杏子は、普通の女子中学生のように胸が徐々に成長しているので、膨らみが大きいが、身長が低いので、かずみの脚が長いから、うらやましく思った。

全裸になった二人がいる。他の利用者がいない。二人はお互いの身

体を見つめ合った。

「杏子ちゃんは、身体が小さいから、かわいい」と言うと「おまえ、脚がとても長いな。身体も細く、肌がツルツルしている」と言った。

かずみは、「杏子ちゃん。触って良い？」と言って、杏子の胸と太ももを触った。

「杏子ちゃんの身体、とても柔らかい！」と叫んだ。

「おい、いいから、もう水着を着てプールに行くぞ」と杏子は言った。

そして、二人はスクール水着を着て、プールに入った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0757z/

かずみ・２２００年の未来へ行く

2012年1月14日06時45分発行